

---

W.B.C !!

平一平

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

W・B・C ！！

### 【Nコード】

N6771I

### 【作者名】

平一平

### 【あらすじ】

野球大好きな幼馴染の奇行に巻き込まれ、ニューベースボールクラブというクラブの一員として、野球部とグラウンドの使用権を賭け、勝負することになってしまった少年、城島克弥の運命は！？

## プロローグ 無死満塁

九回ノーアウト満塁。

一発出れば、いや、ヒット一本で逆転サヨナラの大ピンチ。

そんな状況下に置かれたキャッチャーの心理を、まさかリアルで味わうとは、俺も予想していなかった。嫌な汗が止め処なく流れていて、正直、全てを投げ出したい気分だ。

実際には、九回ではないのだが、このイニングを押さえなければ負け、という意味では同じと言ってもいいだろう。

キャッチャーの俺ですら、こんなにびびってるんだ。マウンド上のピッチャーは、もっと緊張してんだろ、と普通の人なら考えるだろう。

しかし、残念。うちのピッチャーはそれこそ満面という言葉がぴったりなぐらいの笑顔だ。

気が狂ったのか、とも考えられるが、あいつは正真正銘、正気そのものだ。

それもそのはず、このピンチはあいつがわざと作ったものだった。いきなり、最初のバッターに敬遠気味のフォアボール。それを後の二人にも続けて、この状態を作り出したのだ。

あいつは、不敵な笑顔で、

「ハンデはこれくらいで十分か？」

対戦相手に向かって、こんなことまで言っている。

勿論、相手からは野次やブーイングの嵐。代わりに観客からは大歓声。

俺はただ呆れるだけだった。

まあ、でも、そのほうがあいつらしい。

お前はいつでも笑ってる。くだらない緊張や悩みなんかと無縁なんだ。お前は野球をしているときが一番楽しいんだろ？ 楽しいか

ら、笑えるんだ。

俺はお前に無理やり付き合わされてるだけだ。お前ほど、野球に真摯じゃあない。今、お前を鼓舞させるために声をかけまくってる内野の四人も俺と同じだ。いや、一人くらいは本気で野球をやってるやつがいるだろうが、大体はお前の無茶にただ付き合っているだけの、人の良い奴らだ。

だから、こんな試合、ホントはどうでもいい。そう、どうでもいいはずなんだ。

でも、俺の心はそんなこと、一ミリも……いや、一ナノほども考えていない。

矛盾してるって？ だって、仕方ないだろ。ホントのことなんだから。

勝ちたい。

ただ、それだけを考えている。

自分が思っている以上にガキなのか負けず嫌いなのか、それとも、男の子ってのは、こんな状況になると、燃えるように出来ちまっているのか……。

もし、そうだとしたら、男の子の単純な精神の造りに絶望しちまうところだ。

だが、生憎だったな。男の子だから、という理屈は、ある理由により考えられない。

ということとは、俺がガキが負けず嫌いなだけらしい。

十五年も生きて、新しい自分を発見だ。だからといって、何も嬉しくはない。

「さあ、奪三振劇の始まりだ、瞬きなんかして見逃すなよ!!」  
マウンド上には、笑顔で三振宣言をしている馬鹿がいた。

その眼は冗談を言っている眼ではない。炎を灯したように燃えている眼だった。

この場にいる誰よりも緊張すべき立場のはずなのに、誰よりも熱く燃えているこいつの、胆の据わり方は尋常ではない。精神力だけ

なら、メジャークラスだ。

ただ、こっちは一般人なんだ。勝ちたい、と強く思っているが、正直、胃が限界に近い。

こんなプレッシャーを背負いながらプロは毎日を通り過ぎていくのか、と思わず、テレビを通して見る野球選手たちの凄さを実感。

ごめんよ、これからは極力、野次らないことにするよ、とか思いつつ、俺の手は自然とミットを構えていた。

子供のころから、あいつに付き合っつて、あいつの球を取ってるんだ。あいつの投球の間は分かっている。

サインなんかいらぬ。そもそも、サインなんか作ってない。

ただ、あいつが投げたいところに投げて、俺はそれを受けただけだ。

キャッチャー失格？ ほつといてくれ。さっきも言ったように、俺は付き合わされてるだけなんだ。

いつも、あいつは俺の事なんか考えないで、俺を巻き込む。正確には、俺とその他四人か。

そう、このチーム作った、あの日だってそうだった……。

## 一章 幼馴染のあいつ（前書き）

長いので、短く区切ることになりました。

## 一章 幼馴染のあいつ

高校受験という、人生におけるそれなりに重要なイベントを乗り越え、晴れて志望校である志士高校に入学したのも一週間ほど前のこととなった四月十五日の月曜日。

平凡な十五歳の男子高校生、城島克弥じょうじまかつやのその日の朝は、

「……早起きしちまったな」

こんな独り言で始まった。

時計は午前六時半を指している。高校生になってからはだいたい七時過ぎに起きている克弥にとって、それは立派な早起きだった。

しかし、全く理由がない早起きだ。何故か、いつもより早く目が覚めてしまったのだ。

(……二度寝すっかな……)

そんなことを考えてみたものの、完全に目は覚めてしまっており、むしろ寝るほうが困難な状態だった。昨日、早寝をしたわけでもないのに、こんな状態になってしまっている自分の身体に文句をつけなくなる。

だが、文句を言っても始まらないし、実際に文句を言ったら、ただの可哀想な人の出来上がりであるので、克弥は仕方なく、ベッドから起き上がる。

そして、何気なく、窓の外に広がる風景を眺めた。

克弥の家は二階建ての一軒家で、彼の部屋は二階にある。窓からは、隣の家の庭を見下ろすことが出来た。

その隣の庭では、小さいころから割りと日常的に見ることが出来る、お馴染みの光景が繰り広げられていた。

入念に柔軟運動を行う人影が見える。

その身体の柔らかさは感嘆するしかないほどだった。開脚を行っていたが、完全に股が開ききって、座ることが出来ている。見事な

一八〇度開脚だった。

まるで、ヨガかバレエの達人のような身体の柔軟性を、その後も次々と見せつける人物は克弥とは幼稚園のころからの腐れ縁で、高校すら同じクラスになり続けている幼馴染でもあった。

そして、ヨガやバレエの達人ではない。一言で表現するなら、

「……野球バカ」

その熱心な練習振りに、思わず克弥は独り言を漏らしてしまった。

やがて、柔軟運動を終えた幼馴染が、突然、克弥の方を見て話しかけてきた。

「覗いていてなにか楽しいことはあったか？ 克弥」

いつから気付いていたのか、不敵な笑顔を見せる。

克弥は、使い古された筈のようにぼさぼさな頭を掻きながら答える。

「いんや、特に楽しいことはねえが、やることもなかったんでな」

「そうか。なら、降りてこい。久しぶりにボクの球を受ける」

偉そうに命令してくる幼馴染。十年ほど前から、この命令口調は変わっていない。

「……俺がいつまでもお前の言うこと、黙って聞くと思っなよ」

克弥はただ言われたまま従うのは癪だったので、反抗してみたが、

「待っているぞ」

相手のほうは一言、そう告げて、庭のさらに奥に行ってしまう。

「……………ああ、くそっ！」

克弥は寝巻きを脱いで、急いで着替える。

幼稚園どころか、ほとんど生まれた頃からの付き合いだから知っているのだ。

『待つ』と言ったあいつは、何があっても 例え、学校に行く時間になろうとも 自分を待つ、ということをする。

そんな奴、放っておけばいい、と思うことが出来る人でなしにもなりきれない克弥は、お人好し根性丸出しで、部屋を出て、階段を下りる。



洗面所で顔を洗い、髪を見られる程度に整え、玄関に向かおうとすると、

「あら、どうしたの？ まだ六時半よ？」

途中、台所で家事をしていた母親に声をかけられた。

「なんでもねえ。隣に少し用事があるだけだ」

簡単に克弥が答えると、母親はニコニコしながら、

「まあ、いつまで経っても仲良しね、あなたたち」

などと言ってきた。

言われた克弥はウンザリする。

仲が良いから隣に行くわけではない。そうしないと罪悪感に捕らわれて仕方ないから行くのだ。小心者の自分は、自分の関係する事柄で他人に迷惑をかけたくないのだ。

そのところを誤解しないでほしい、と克弥は思う。

しかし、そんなことを言っても、「照れちゃって〜」などと言って、まともに取り合おうとしない母親であることは分かっているのだ、これ以上、相手にはしないことにする。

玄関の靴箱の上に無造作に置かれたキャッチャーミットを手に取る。

約二ヶ月ぶりに使うことになりそうなミットの重量を少し懐かしく感じつつ、右隣の家に向かう。

その家の玄関の門の鍵は開いている。人が家にいる間は、この状態がこの家庭の常だ。

そして、克弥は出入り自由の許しを得ている。子供の頃から変わらない特権である。

敷地内に入ると、克弥は庭へと向かった。

たどり着いたそこには、克弥を呼び出した人物が、

「遅いぞ、克弥」

ボールを持たず、投げる動作の確認のためのシャドーピッチングをしていた。

「うるせえ。ご近所といえども、身だしなみくらいは整える必要が

あんだよ」

「ふむ、確かに、さつきまで中古の箒のように見苦しい髪型だったのが、それなりに新しい箒程度にはなっているな」

「お前の髪もぼさぼさだろがっ！ 何、自分のことは棚に上げてやがる！」

「うるさい、黙れ、近所迷惑だ」

克弥の反論は、そんな一言で封殺された。

克弥は盛大にため息をつきつつ、久しぶりに訪れた庭を見回す。

この家の庭はちよつとおかしい。

まず、広い。家に使用している面積のほうが狭いくらいである。

それくらいなら、おかしいとは言えないかもしれない。しかし、さらにおかしいことがある。

「早くミットを付けて、そこに座れ」

そう言つて、一般家庭の庭にはありえないものの上に登り、さらにありえないものを指す。

土を盛り上げて作られたマウンドと、野球で使うホームプレートが置かれたバッターボックスとキャッチャーボックスである。マウンドには当然の如く、投手板が埋め込まれている。

何故、こんなものがあるのか。それを説明するのは、簡単だ。

この家の主が無類の野球好きであり、さらに元・プロ野球選手だからである。

本人曰く、あまりにも野球が好きすぎて、肩を壊して引退してからもマウンドの感覚が忘れられず、庭にわざわざ作ってしまった、そうだ。

室内に作つても良かったはずだが、『野球は基本、外でするもの』という考え方をし、妥協もしなかった結果がこれである。

ボールを投げられなくなった家主にとって、このマウンドに立つことだけが、自分と野球を繋げる接点になっていた。

しかし、今では、自身の子供の練習場所となっている。

親子揃つて、野球バカ。この家のおばさんは苦勞しているんだろ

うなあ、と克弥は同情を禁じえない。

そんなことを考えていても、ここに来てしまったからには仕方がない。克弥は渋々、左手にミットをつける。そして、感触を確かめるようにミットを開閉させ、その中心に握り拳をぶつける。

「……確かに久しぶりだな、お前の球、受けるの」

「二月、三月と受験に忙しかったからな。まあ、その間もボクは練習を欠かさなかったが」

野球バカは、受験中も練習は欠かさないらしい。頭もそんなに良くないくせに、よく高校に受かったな、と克弥は思う。

「軽めに投げるぞ。早く構えろ」

言われて克弥は、少し慌てながらもミットを構える。

そして、克弥は幼馴染の投球を約二ヶ月ぶりに見る。

振りかぶられた両腕。

地から離される右足。

しっかりと地面を踏みしめる左の軸足。

宙に浮いた右足を前方にスライドさせ、

腰の右側を中心にして、身体が回転する。

ボールを持つ左手は身体に隠れて見えにくい。

クラブをはめる右手を、身体の前方に置き、

右足が着地するその刹那、

ようやく身体に隠れていた左腕が姿を現せる。

鞭のようにしなるその腕から

ついに、ボールが放たれる。

ボールは、糸を引くような直線の軌道を見せながら、

克弥の構えたミットの中心に、寸分の狂いも無く、吸い込まれていく。

パーンッ！！

乾いたミットの音が響く。

爽快な気分にさせてくれる音だった。

( つ！ 相変わらずとんでもねえな、こいつの球…… )

受けた克弥は、心の中で賞賛する。

しかし、

「一二〇キロそこそこ、といったところか……今日は調子が悪いな」  
投げた本人は、ぼそりと不満そうに呟いた。

一二〇とは、投げられた球の時速(キロメートル毎時)のことである。

正確な数値は機械を使わなければ、計れないが、この野球バカは自分の投げた球の球速ならだいたい分かるらしい。

一流のプロでも一三〇キロくらいの選手がいるということを考える  
と、決して遅くはないのだが、野球バカと称される人物が投げる速  
さとしては、物足りなく感じる数字であることも確かだろう。同年  
代でも、一四〇や一五〇キロを超える球児がいるのだから、なおさ  
らだ。

しかし、これにある条件を付け加えると、克弥と同じく、賞賛する  
しかなくなるだろう。

克弥の幼馴染の野球バカは、

身長一五〇センチあるかないかぐらいの、

小柄で、華奢な、

女の子なのだ。

「調子が悪いって……軽く投げてそんだけ出りゃ、十分だろ」

「いいや、一三〇を下回るのは調子が悪い。まだまだだな、ボクも」

野球バカで、偉そうな口調で、一人称は「ボク」。幼児体型で、  
顔も幼く、まるで克弥と同年代には見えぬ、ぼさぼさの短い黒髪と、  
その一人称から、背の小さな男の子にも見える。

そのくせ、よく磨かれた宝石を髣髴させる大きな漆黒の瞳が特徴的  
で、顔立ちも端正ではあり、美少女とも言えなくはない。白いTシ  
ヤツと黒のスパッツという服装が活発で健康的、といった彼女の特  
徴をよく表している。

それが、克弥の幼馴染の女の子、和田桃わたももの姿であった。

ちなみに、『ボク』という一人称は、「野球をするからには、女だからといって舐められたくはない。男らしく、『俺』ということにしよう」と、小学生の頃に決心した桃に対し、彼女の母親が「もうちょっと女の子らしくして!」と、嘆願した結果の折衷案だそう  
だ。

全く折衷してない気もするが、母親もどうやら諦めたようで、何も言わなくなったらしい。

「早くボールを返せ。一球では終わらんぞ」

桃が催促してきたので、克弥はボールを投げ返す。

受け取った桃は、ボールの縫い目等を確認し、次の投球に備える。克弥もミットを構える。

付き合いの長い克弥は、桃の眼を見るだけで、桃がどこに投げたがっているのかが分かる。

どの程度分かるか、というと、

(右打席にバッターが立つてる想定で、その懐に直球を、か……)もはや、超能力とでもいえるくらいに分かっている。

幼いころから野球バカだった桃に付き合っただけ練習しているうちに、桃とは、野球に関しては以心伝心ともいえる関係になってしまった。

良いことなのか悪いことなのか、判断に困る関係だ。

そんなことを考えている間に、桃が投球モーションに入る。

彼女のモーションは幼いころから独自に改良を重ねた、特殊なもので打者からはタイミングを取りにくいものとなっている。

野球で女は男には敵わない、と思われることを何よりも嫌っている桃は、勉強は全く出来ないくせに、野球に関してのことなら、何でも詰め込み、実践し、モノにする。

パアアアアアッ!!

ミットにボールが収まる。

「またも、渴いた音が周囲に鳴り響く。

先程より、球のスピード、威力共に増しているようだ。

「やはりこのぐらいの球威がなくてはな！ さあ、どんどん投げ込むぞー！」

桃のテンションもかなり上がってきているようだ。

克弥もボールを即座に返して、また桃の希望するコースに構える。そして、またも、ボールは克弥のミットに吸い込まれるように収まっっていく。

このような投球練習を七、八十球ほど繰り返し、時刻が七時半に近づくと、

「……よし、ラスト一球だ」

そう言っつて、桃は克弥から返されたボールを受け取った。

「？ 早くないか？ 学校なら八時までにバス停に行きや、間に合うだろ？」

八時のバスに乗れば、八時二十分には校門前の駅に着く。教室に入るのは八時二十五分くらいで、校門が閉まる八時半には十分間に合はずだ。

現にこの一週間、克弥と桃はだいたい八時のバスに乗って登校し、遅刻はしていない。

中学生のときは登校時間ギリギリまで投球練習をしていたのに、早めに切り上げる桃に、克弥は疑問をぶつける。

「シャワー浴びて、食事をするにしてもそんなに時間かからねえだろ、お前なら」

野球以外のことは、何をするにしても手早く済ませてしまう桃なら、登校の準備を整えるのに十分もかからないだろう。

「ふむ、実は、な……」

すると、桃が克弥の疑問に答える。

「そろそろ高校生活も一週間経って大分慣れてきたから、少し走って学校まで行こうかと思いついたんだ」

「……………お前は何を言っているんだ？」

克弥には、桃の言っていることがさっぱり分からなかった。

「学校までの距離はこの家から約十キロ。バスを利用せず、走って学校まで行く場合、四十五分ほどかかる。その他、信号とかの足止めを考えると、七時半くらいにはここを出るべきだろう。だから、これが最後の一球だ」

この一球で練習を終える意味を桃は説明するが、克弥が聞きたいのはそんなことではない。

「……………俺は、なんで走っていくのか、を知りたいんだが……………」

その一言に、桃は不思議そうな顔をして、

「スタミナ作りと足腰の鍛錬に決まっているだろう？ 投手になくてはならない要素を二つも鍛えられるのだから、やらない手はあるまい？」

と、言つてのけた。

「……………分かった。お前、真性のバカだろ」

「失礼な奴だな、ボクはバカじゃない、野球バカだ」

「堂々と言つな！ 自覚がある分、性質が悪いんだよ！」

「そういうわけで、これが最後だ。構えろ」

「いきなり話を終わらせるな！ お前、面倒くさいからって会話を投げたろ！！」

「ピッチャーなだけに会話も投げるさ」

「上手くねえよ！ なんだ、そのどや顔！！」

しかし、桃は、これ以上、話す時間はない、といった感じで一方的に会話を打ち切る。

克弥も、こいつにはこれ以上何を言っても無駄、と悟り、渋々ながらミットを構える。

そして、渴いた音がまたも、鳴り響いた。

## 二章 幼馴染との登校（前書き）

長いので、短く区切りました。



## 二章 幼馴染との登校

「……ただいま」

家に戻った克弥はミットを玄関の靴箱の上に置く。ここに置いておけば、また桃に呼び出されることがあっても、すぐに駆けつけることが出来るからだ。

もはや、そうすることが当たり前になっている自分を、克弥は少し情けなく思う。

次はないぞ、もうあいつを甘やかすのはやめだ、と心に誓い、洗面所で手を洗った後、一階のリビングに向かい、朝食を取る。

その後、部屋に戻り、制服に着替え、今日の時間割を確認していると、インターフォンの鳴る音が聞こえた。

こんな時間に誰が、と克弥は時間を確認すると、いつの間にか七時四十分になっていた。

「克弥〜！ 雪華ちゃんが出来たわよ〜！」

母親の声が聞こえる。

（雪華が……？ 早いな、いつもならもう少し後に来るのに……）  
克弥は少し疑問に思いつつ、鞆を持って部屋を出、階段を降り、玄関に向かう。

雪華とは、克弥の家の左隣に住む少女で、桃と同じく幼馴染のことである。

幼稚園から高校まで同じクラスという、これまた桃と同じく腐れ縁の繋がり、小学校時代から、彼女が克弥や桃を誘って一緒に登校するのが日常になっている。

いつも決まった時間にやってくる彼女が、時間を早めたことを気にしつつ、克弥は一階にたどり着いた。

玄関には、克弥の通う志士高校の女子の制服を着た少女が立っていた。

長く、艶のある黒髪を風も無いのにたなびかせ、同じく艶やかな黒で染まる切れ長の瞳で克弥を見つめている。

男ならば思わず見蕩れるだろうその顔立ちは、美少女という表現では足りないくらいだ。

スタイル抜群で、出るところは出ていて、締まるところは引き締まっている。桃の出るべきところが引つ込んでいる幼児体型と比べると、とても同じ年齢で同じ性別の生き物だとは思えない。

そんな少女が、

「おつす！ おら雪華！」

克弥に向かつて、どこかのサイヤ人のような挨拶をかましてきた。

「……今日は早いな、どうしたんだ？」

克弥は何事も無かったかのように、挨拶をスルーして用件を聞く。

彼女こそ雪華　フルネームは岩村雪華いわむらせつか　という、克弥の幼馴染

染二号である。

頭脳明晰で運動神経も抜群、まさに才色兼備であり、一見、非の打ち所が無いように見える彼女だが、実は幾つか致命的な欠点がある。

第一に、先程の挨拶で分かるとおり、常日頃からふざけていること。

第二に、

「……渾身の挨拶について何のコメントもなく無視されて、おらドキドキしてきたぞ！」

「朝から誰かさんにツッコミすぎて疲れてんだよ。いいから用件言えよ」

「突っ込みすぎてって……それはエロい会話と取っていい？」

エロい方向に話を持っていきたがること。

「いいわけあるか！　朝からディーブなんだよ！　会話の質が！　いいから早く用件っ！！」

克弥が急かすと、仕方がないといったように、肩を竦めて、雪華は答える。

「かつちゃん、自分が今日、日直だつてこと忘れてるだろうから、早めに誘いに来てあげたのよ。日誌とか用意しなきゃいけないでしょ？ 感謝しなさい」

「あ、そうか、悪いな、わざわざ」

親切心でやってきてくれた相手を雑に扱った態度を詫びる克弥。ちなみに、『かつちゃん』とは、雪華が克弥に付けた渾名である。

「いいのよ。それより、早く行きましょ」  
外を指差し、雪華が言う。

克弥は頷き、台所かりビングにいるであろう母親に声をかける。

「母さん！ 今日は今から学校行くから！」

すると、リビングから「いつてらっしやい！」という声が返ってきた。

「よし、行こう」

克弥は雪華に話しかける。

「次はピーチちゃんの家ね」

雪華がそんな言葉を返して、外に出る。

『ピーチ』とは、桃のことで、雪華は桃にも渾名を付けている。続けて『姫』をつけることによって、いつも亀にさらわれる迷惑お姫様の出来上がりだ。

「ああ、桃ならもう出たはずだぞ」

「えー!? なんで!?!」

克弥の言葉に、何故か盛大な反応を見せる雪華。

「…………ランニングして学校に行くらしい。足腰作りとスタミナ作りのためだよ」

克弥は桃に聞いた理由を雪華に告げる。

「……………」

雪華は克弥の言葉を聞いて、驚きを隠せない。

克弥自身も最初は理解できなかった。野球バカのこととは分かってらん、と肩を竦めてみせる。

しかし、雪華は、

「……じゃあ私は学校に着くまでピーチちゃんに会えないの!？」  
克弥とは全く違うところで驚いていた。

「困ったわ! 学校に着くまでピーチちゃんの姿も見れない! 声も聞けない! あの未成熟な胸も揉めないなんて!」

雪華の第三の欠点が出始めた。

彼女は桃のことが真剣に大好きで、桃がいないと、このように禁断症状が出てしまうらしい。

これが第三の欠点、ピーチちゃん中毒（雪華命名）である。

「天下の往来でセクハラ発言してんじゃねえ!」

とりあえず雪華の口に手を当てて、黙らせる克弥。そしてそのまま引きずって、バス停まで向かうことにする。

「むごー!」

なにやら抗議の声を出している雪華を無視して克弥は進む。この後、己に起こる不幸をまだ彼は知らない……。

バス停に着くと、同じ志士高校の制服を着た男子生徒と女子生徒がバスを待っていた。

二人ともかなりの長身だ。どちらも一八〇センチはあるだろう。

「ん?」

その二人を見て、克弥が呟く。

その克弥と雪華に気付いた男子生徒が手を振って、

「おっす! かつちゃん! せつちゃん!」

と、克弥と雪華の渾名を呼ぶ。それに遅れて、女子のほうも、

「お、おはよう。克弥くん、雪ちゃん」

と、小さな声で克弥たちに挨拶をした。

「恭一郎に蓮乃?」

克弥はバス停の二人に近づき、その名を呼ぶ。

「ん? 手がキャッチャーミットみてえに腫れ上がってるけど、どうしたん?」

恭一郎と呼ばれた男子生徒が、克弥の右手を見て、尋ねる。

彼のフルネームは鈴木恭一郎。光の加減によっては金にも見える茶髪が特徴的な、ガタイのいい男だ。ちなみに髪の色は地毛なのだが、元来のお調子者といえる性格により、染めていると誤解されることが多い。

克弥の腐れ縁の幼馴染三号で、両親が関西の出身らしく、関西弁を喋るのも特徴である。

「さつき、猛獣におもいつきり噛まれて、な……」

と、噛んだ本人である雪華を睨みつけて、克弥は答える。当の雪華はどこ吹く風で口笛を吹いている。

すると、蓮乃と呼ばれた女子生徒が心配そうに、

「だ、大丈夫ですか！？ も、猛獣って、犬ですか！？」

と、克弥の手を取って、慌てふためく。

「……悪い、冗談だ。そこにいる悪魔に噛まれたんだ」

「悪魔って存在するんですか！？」

「……とにかく、心配すんな」

この、人の言ったことをそのまま信じてしまう女の子のフルネームは、小笠原蓮乃。鴉の濡れ羽色と表現できるきれいな黒髪で、前髪を切り揃えているのが特徴的だが、それよりも単純に、背が高い、ということが特徴となっている。そして、克弥の幼馴染四号である見ての通り素直な性格。素直すぎる、と言うべきか。で、さらに内気で大人しく、目立つことを好まない。しかし、その背丈とともに胸のボリュームも男ならば注目せずにはいられないくらいあるので、外見はかなり目立ってしまったている。自分の思いとは裏腹に、身体が成長しすぎてしまったようだ。

「つか、なんでお前ら、この時間にいるんだ？ いつもならもっと後だろ？」

克弥が二人に質問する。

恭一郎と蓮乃は、いつも克弥たちと同じ時間のバスに乗る。つまり、日直で早めに学校に行く今日の克弥とは、バス停で会うことはないはずなのだ。

「私が昨日のうちにメールで知らせておいたの。明日は少し早めに行くことになる、って」

答えは雪華から返ってきた。

「やっぱり朝はみんなと一緒に登校しないと、やる気が出ないのよね」

それが理由らしい。自分の気分のためとは、何とも雪華らしい理由だ。

「あれ？ でも、桃っち、おらへんやん？」

恭一郎の言葉で、極度にやる気を失くす雪華。

「そうなのよ……これじゃあ、目標の『一日百回ピーチちゃんを愛でる』を達成できるか怪しいところだわ……」

「訳の分からん目標を立てるなよ」

克弥が呆れ顔で言う。

「仕方がないから、はすのんの胸でも揉んでおこうかしら」

獲物を見つけた獣のような目で、蓮乃を見る雪華。胸を揉むのは彼女にとってスキンシップの一環らしい。蓮乃はその視線から逃れるように、克弥の後ろに隠れる。しかし、蓮乃のほうが克弥より背が高いため、完全には隠れ切れていない。

その事実気付いてしまった克弥は、微妙に落ち込むが、そんなことには気付かず、蓮乃は心配そうな声で、桃のことを聞いてくる。「も、桃ちゃん、どうしたんですか？ ま、まさか、風邪引いたとか!？」

「……それはない」「」

蓮乃以外の三人の言葉がもろに被った。バカは風邪を引かないというのは、根拠がなくても共通認識になっているものようだ。

「なんかスタミナ作りと足腰作りのために、走って学校に行くらしい。で、七時半には出て行った」

……

克弥の説明に、蓮乃の目が点になる。

「……まあ、桃っちらしいわな。むしろこの一週間、我慢してたと  
いうべきか」

恭一郎は呆れ顔になりつつも、桃の行動に多少の理解を示した。  
やがて、バスがやってきたので、乗り込むことにしたが、

「……走って、学校に……？」

蓮乃は、まだ理解できずに固まっていた。

### 三章 いつもとどおりの高校生活（前書き）

長いので、短く区切りました。



### 三章 いつもどおりの高校生活

志士高校一年二組の教室。

窓際から二列目、最後尾の自分の席に克弥は座る。

窓際の隣の席に恭一郎が、その前の席には雪華、更に前に蓮乃がそれぞれ座る。

高校生活最初の席替えは、自由に座れ、ということになったので、仲の良い連中がこのように固まって座ることになった。

「それにしても凄かったな、さっきの桃っち」

恭一郎が先程、バスの中で見た光景について話す。

「まさか、バスと張り合ってデッドヒートを繰り広げるとは思わなかったな」

克弥もその光景を思い出す。

学校前の駅まであと五百メートルとなったところで、バスに乗っていた蓮乃が走っている桃を見つけた。

桃もこちらに気付いたようだった。そして、何を思ったか、いきなり桃はバスを追いかけるようにして全力疾走を始めた。

その後、繰り広げられたバスと人間のスピード対決。普通なら追いつけないだろう距離を一気に詰めてきた桃の走りは、驚嘆に値するものだった。

しかも、バスが駅に止まっている間に追い抜いて、自分だけさっさと学校に入っていた。

「で、結局何がやりたかったんだ、あいつは……」

遅刻をしそうなわけでもないのに、いきなり全力で走り出した桃の行動に呆れ果てる克弥。

「なんか負けたくなかったんじゃない？ ピーチちゃん、負けず嫌いだし」

「疲れそうだな、あいつの人生」

雪華の答えに、克弥は正直な感想を返す。

「ところで、桃ちゃんがまだ来てませんけど、どうしたんでしょうか？」

蓮乃が疑問を口にする。確かに、最初に校門を抜けたはずの桃の姿が教室にはない。

「体操服着て走ってみたいやし、更衣室で制服に着替えてるんとちゃう？」

「入学前に体操服を三着も買った意味が、今日、ようやく分かったわ」

恭一郎が蓮乃の疑問に答え、雪華は自分の疑問を解決したそのとき、

「おはよう、雪華、恭一郎、蓮乃。元気そうだなによりだ」

噂の張本人がやってきた。その後ろに、何故だが酷く疲れた様子の銀髪の男子生徒の姿が見える。

「おはよう！ ピーチちゃん！ ……ああ、ついでに、後ろのユウくんもおはよ」

「……おはよう。今日も元気そうですね、岩村さんは」

あまりにも態度の落差が激しい雪華の挨拶に、ユウと呼ばれた銀髪の男子生徒はこめかみをひきつらせながらも丁寧に戻答する。

彼のフルネームは、西岡遊理。ロシア人の祖父を持つクォーターで、その輝きを放つ銀髪は地毛である。彼が克弥の幼馴染、最後の一人である。

小さな体つきと幼いながらも気品が感じられる美貌で、美少年という言葉が良く似合う容姿をしているが、

「っていうか、いったいぜんたい何を考えているんだろっねえ！？

このお馬鹿さんはあ！！ 何で女子シャワー室が満員だったからって、男子シャワー室に入ってきたやがるかなあ！？ ひよっとして頭、濃んでんじゃないかなあっ？」

と、桃を指差して幼馴染連中にだけ聞こえるような小さい声で言う。

このように、顔のイメージに合わない、根暗で口が悪いという性格が彼の本性だが、他人の前では猫を被り、爽やかな青少年を演じる。しかし、幼馴染の前では、たまに化けの皮が剥がれる。

言われてバカ 無論、桃のことである を見てみると、確かにシャワーを浴びてきたらしく、髪が湿っており、タオルを手に髪を拭いていた。

そして、遊理に批判されたバカは、全く悪びれることなく、  
「女子がダメなら男子のほうを使え……我ながら悪くない逆転ホームランな発想だったな」

と、抜かしていた。

「何が逆転ホームランだああ！ むしろエラーだろおおおっ！！」  
「上手いこと言うな。落語家になれるんじゃないか？」

「落語家甘く見てんじゃねえええ！ ていうか少しは反省した態度をみせるおおおっ！！」

「反省ならしているぞ。これからは誰もいないときに使うつもりだ」  
「何にも反省してないよねえええ！！ 全く何にもおおおっ！！」  
いつの間にか、桃と遊理の間で漫才が始まっているが、このような掛け合いは、いつものことであり、幼馴染連中は完全に慣れきっている。遊理は小声で文句を言いくるが、桃は軽く流している。

桃のその態度に遊理の怒りが頂点に達しようとしたそのとき、

「おはよう、西岡くん」

「おっす、西岡、どうしたんだ？」

クラスメイトが遊理に話しかけてきた。そのクラスメイトに遊理は笑顔で返す。

「ああ、おはよう、いや、何でもないよ。和田さんとお喋りしてただけさ」

遊理は即座に猫を被り、笑顔が眩しい温厚なキャラへと変貌を遂げる。

「あれだけ怒ってたのに、よく即座にキャラを変えられるな……」

「あれが妖怪猫又かぶりの特殊能力やから、当然や」

「猫又をかぶるのか？」

「そうや。猫又といえは、最近になってえらい萌えキャラティストになったことで有名やな」

「そりや猫娘だろ」

恭一郎は関西人の血を引き、お調子者といえる性格であるのに、ボケはくだらなさすぎる。

「化け猫の類について語りあつ……これがホントの化猫語、やな」  
「文字にすると、噛みました、と言えんこともないな」

そして、意外とラノベや漫画、アニメが大好きだ。

ただし、それは恭一郎だけでなく、律儀にツツコミを返す克弥にも言えることである。

「ああ、そうだ。お前たちに伝えたいことがあるから、昼休みに全員、食堂に集合してくれ」

何かを思い出したかのように、桃が克弥たちに伝える。

「大事なことから。全員参加だぞ」

そして、自分の席に着く桃。まだ桃に言いたいことがあったのか文句を呟きながら、遊理も着席する。克弥のすぐ前が桃、その前が遊理の席である。

「大事なこと、って何なんだよ？」

克弥は前の席の桃に聞くが、

「昼休みまで内緒だ」

と、桃はそれ以上、答えるつもりはないようだった。

やがて、教室に一人の女性教師が入ってきた。このクラスの担任であり、現国の担当でもある、原真奈先生だ。

「はーい、朝のホームルーム、始めるわよ」

明るい声が教室に響く。いつも笑顔を絶やさず、美人で優しいと評判の原先生は、どのクラスでも人気の高い先生だ。

栗毛の長髪を揺らしつつ、教卓にたどり着いた原先生は出席簿を開き、

「まずは出席をとるわね」

と、五十音順で生徒の名前を呼んでいく。  
こうして、本日の高校生活も概ねいつもどおり始まった。

#### 四章 ニューベースボールクラブ（前書き）

長いので、短く区切りました。

## 四章 ニューベースボールクラブ

時は移り、問題の昼休みがやってきた。

桃に言われたとおり、克弥、雪華、恭一郎、蓮乃、遊理の五人は食堂に集まって昼食をとっていた。

しかし、肝心の桃が、まだやってきていない。

「集合かけた人が遅刻するって、どうということだろうねえ？」

「いつものことだ、気にするな」

朝のシャワールームの件を引きずっているのか、言葉自体は優しげだが、苛立ちを押さえ切れていない様子の遊理を克弥が宥める。

「でも、何でしょうね？ 大事なこと、って……」

「なんか面白い遊びでも思いついたんじゃないかね？」

蓮乃の疑問に、たこ焼きを頬張りながら、恭一郎が答える。

「うちの学食、たこ焼きなんか置いてんのか……」

「関西人のエネルギー源やから、俺は嬉しいで？ 三食たこ焼きでもいいくらいや！」

「それはもはや関西人とかじゃなく、ただの偏食だ」

恭一郎なりに場を和ませようとして、ボケたのかもしれないが、あまりのくだらなさ全員が辟易としているのが見て取れる。ギャグセンスのない関西人もいるだろうが、それにしても面白くない。

「なあ、さっき返ってきた英語の小テスト、どうやった？」

そんな空気を読んでか、急に話を変えてくる恭一郎。

「私には聞くまでもないでしょ？ 当然に満点よ」

「す、凄いね、雪ちゃん。私、一問間違えちゃった」

成績優秀な女子二人の会話を聞いて、さらに不機嫌になる遊理。

「ちくしょう……なんでいつも雪華に勝てない……」

どうやら彼も、一問間違いだっただよう。小学生時代から、遊理は頭脳明晰、運動神経抜群だったが、学力においては雪華に勝った

ことが今まで一度もない。

そんな事情もあり、遊理は雪華をライバル視している。

「身長も私に勝ったこと、ないわね」

「うるっせえええですよっ!!」

遊理の傷を容赦なく抉る雪華。彼女にとって、遊理をこのように挑発することも日課のようなものだ。遊理も思わず、素が出てしまっている。

この幼馴染メンバーが揃ったときの騒々しさに、克弥は改めてため息をつく。

同じ高校を受けよう、なんて誰も言い出していないのに、図ったかのように全員同じ学校を受け、あまつさえ同じクラスになってしまった。

腐れ縁というものは本気で切ろうと意図しない限り、永遠に続くものらしい、と克弥が奇妙な悟りを開いているところに、

「すまない、待たせたな」

偉そうな口調で、桃がやってきた。その手には、昼食のお弁当となにやらプリントを持っている。

「呼び出した本人が遅刻してくるのは、どうかと思うなあ？ 和田さん？」

遊理から文句が飛び出す。猫を被っているので丁寧な口調ではあるが、怒気が多分に込められていた。

「すまない、悪かった」

しかし、言われた本人は遊理を軽やかにかわし、克弥の隣の空いている席に座ろうとする。

「ピーチちゃん！ こっち、こっち!!」

だが、雪華に呼び止められる。

「そっちには空いている席などないぞ？」

「あるわよ。ほら、こ・こ」

疑問をぶつける桃に、雪華は自分の太ももを叩きながら、ここに座れ、とジェスチャーしている。



「ふむ……確かに座り心地は良さそうだな。柔らかそうで、良い感触が期待できるだろう。だが、胸などを触られては落ち着いて話もできないだろうから遠慮しておこう」

「真面目にコメントを返すなよ、お前も……」

さらりと雪華の申し出を断り、席に着く桃に、呆れながらもつつこむ克弥。雪華は残念そうな顔をして、手をワキワキと動かしていた。

これで、いつものメンバーが全員、揃ったことになる。

「では、早速だが重大発表をさせてもらおう」

そう言って、遅れてきた桃が全員の注目を集める。

「飯、食ってからじゃ駄目なん？」

たこ焼きを空中に放って、口でキャッチして食べながら恭一郎が聞く。

「まあ、食べながらもいいから、まずはこれを見てくれ」

そう言って、桃は持っていた紙をテーブルの中心に置く。

なにやら文字が書かれていたので、克弥が読み上げる。

「クラブ設立申請書……？」

「その通りだ」

桃は腕組をして、大きく頷く。

「うちの学校は、クラブ活動に力を入れているらしく、新しくクラブを作るには部員五名と顧問の教師さえ決まれば、どんなクラブでも認めてくれるという、心の広い学校だ。生徒のジシユセーをソクチョーだかなんだか、そういうことだそうだ」

「そりゃ知らんかったわ。うちの学校、そんなに自由やったんか」

桃の説明に、恭一郎が素直に感心する。

「なんにせよ、ボクは新しいクラブを作ることにしたのだ。そこでなんだが、お前たちの力を借りたい」

桃がそう言って、援助を求めると、

「いいわよ。ピーチちゃんの頼みなら、なんでもやっちゃうわよ」

高速の二つ返事で、雪華は桃の頼みを引き受けた。

「さすが雪華。話が分かる」

桃は嬉しそうに頷く。

雪華にとつて何よりも優先するべきなのは楽しそうなことであり、桃はいつでも雪華にとつて楽しいことを提供してきた。そんな十五年間の流れから考えると、雪華の二つ返事はいつものことである。だから、克弥たちは雪華に対して、もう少し考える、だの、せめて何をするか聞いてからにしろ、などと諫めたりはしない。結局、結果は変わらないからだ。

だが、克弥たちは違う。少なくとも、何をするかぐらいは聞いておかないと、不安で仕方がない。

「何部を作る気なんだよ？」

代表して、克弥が質問する。この学校には野球部は既にあるため、いったい桃が何に興味を持ってクラブを設立しようとしているのか気になったからでもある。

まさか、野球バカだからといって、自ら二つ目の野球部を作る、なんてことは言い出さないだろう。

「良い質問だ。聞いて驚け……！」

そう言ってから、桃は息を吸い込み、まるで百獣の王の如く、威風堂々と告げる。

「野球部だ……！」

一瞬の静寂。

まるで時を止められたかのような錯覚に襲われる。思わず、「世界つつ!？」と叫んでしまいそうになる。

無限にも思える、その無音の時間の中、克弥は考える。

(……ダメだこいつ、はやく何とかしないと……)

野球バカの考えを甘く見すぎていた、と反省する。

やがて、桃の言葉により、時は再び動き出す。

「ただの野球部ではないぞ！ 男女混合の野球部だ！ 男だろうが女だろうが関係なく、野球をすることができ自由なクラブだ!! 今ある野球部との区別のために新しい野球部『ニューベースボー」

ルクラブ』という名前にしようと思っっている!!」

「待てこら桃」

「世界大会でも優勝できるほど日本の野球は進化した! ならば、ここで野球の新しい可能性も考えるべきだとボクは考える!」

「待てつて!」

テンションが異様に上がっている桃を、克弥が止める。

しかし、

「新しい可能性とはすなわち、未だに誕生していない日本野球機構における初の女子野球選手の誕生を目指し、男女混合野球を実現することに他ならない!」

エンジンがかかった桃は、簡単には止まらない。聞いている人がいるかどうかなど関係無しに演説に熱中する。

「さらに! この『ニューベースボールクラブ』の活動から、甲子園に今は出場できない女子選手を出場できるように働きかけていきたい! さあ、皆! ボクと一緒に野球史に新たなページを刻もうではないか!!」

「だから待てつて言っただろ!」

克弥が桃の肩を掴んで呼びかけると、ようやく桃は克弥の方を向いた。

「なんだ、克弥?」

「なんだ、じゃなくて! 野球部設立とか、甲子園出場とかってお前」

「ふっ、案ずるな。お前の不安は分かっている」

桃はそう言った後、突然、克弥を指差し、「一つ!」と数を数えだす。

そして今度は雪華を指差し、「二つ!」、蓮乃を指差し、「三つ!」、恭一郎で「四つ!」、遊理で「五つ!」と順に数えていき、やがて沈黙。

なにがしたいのか、と訝しげな視線を克弥が桃に投げかけていると、桃が満足げに、

「どうだ。五人、ちゃんというぞ。設立のために必要なメンバーは揃っている」

腕組をしながら偉そうに告げる。

また、時間が止まった気がする。が、克弥の言葉で今度はすぐに動き出した。

「そんなこと一切気にしてねえよ！ 野球部はもうあるんだから、そっちに入ればすむことじゃねえか！」

「マネージャーではなく、選手として入れてくれと頼んだら断られた。だったら、新しく作るしかないだろう？」

「それに野球やるなら最低九人必要なのに全然足りてないじゃねえか！」

「作った後に増やせばいい」

克弥の言うことに間髪入れずに返す桃。それでも克弥は食い下が  
る。

「そもそも俺たちは入るとはまだ言っていない」  
「俺は入るぜ？ なんか面白そうやん、野球史のページを刻むと  
か」

「わ、私も特に何もやることはないし、入ってもいいんだけど……」  
しかし、いきなり恭一郎と蓮乃の発言で、水を差された形になっ  
た克弥は続けたかった言葉を言うタイミングを見逃し、口をパクパ  
クさせるだけだった。

「勿論、克弥も参加してくれるな？」

周りにはなんだか断れない雰囲気になっている。桃が何か提案する  
と、だいたいいつも、こんな雰囲気になる。そして、流されやすい  
克弥は毎回、この雰囲気に向けてしまう。

しかし、

「僕はもう野球部に入ってるんだけど」

遊理のこの一言で、空気が変わった。

「……………しまった！ 盲点だった！」

桃は頭を抱え込んで、唸りだす。

「……完全に忘れてたんだああ、へええええ……」

遊理がこめかみに皺を寄せ、小声で言う。遊理は中学の頃から野球部に所属していて、それなりに上手い。そして、高校に入つてすぐに、野球部に入部していた。

そういえば、この高校の野球部が昔は甲子園の常連校で、一時期、成績が落ち込んだが、去年、久方ぶりの甲子園出場を果たしたということを、克弥は思い出した。

ちなみに遊理が怒るだろうので、皆黙っていたが、この場の全員、遊理が野球部に入部していたことを忘れていた。

しかし、一人くらいなら適当な生徒を勧誘するなどで、どうにでもなりそうなものだが、

「なんてことだ……最初はこのメンバーでないと意味がないのに……」

他の生徒を勧誘するという案は何故が取れないらしい。

それを聞いて、克弥は内心、助かった、と思う。

確かに、別段クラブに所属もせず、毎日やることなく過ごしている克弥だが、桃の行動に振り回されて時間を費やすことになるのは、回避すべき事態だった。もう、高校生になったのだから、いつまでも桃を甘やかしてはいけない。

「……ユウくん、野球部、辞めちゃいなよ。あ、兼部でもいいよ」

「ふざけないでほしいなあああ。うちの野球部は一回退部したら、二度と復帰できないんだよねえええ！ それに運動部二つ掛け持ちとか、鬼かあああつ！！」

雪華が遊理に無茶な要求をするが、

「雪華、いいんだ……」

桃が雪華の無茶振りを止める。

そして、桃は肩を落として皆に告げる。

「すまない、みんな……期待させるだけさせておいて、こんなことになるとは……」

いや、別に期待なんかしていない、と克弥は言おうと思ったが、

桃の落胆っぷりがあまりに激しかったので、言える空気ではない、と判断して自重した。

桃の落ち込んだ態度に、この空気を作る原因となった遊理も困惑している。そして、他の連中も何も言えず、黙ってしまっている。

桃のテンションは、この幼馴染グループの核と言ってもいいほど、影響力がある。昔から桃の提案、発言で色々なことをやらかしてきたことにより、桃についていくということが自然な状態になってしまった結果である。

まるで、お通夜のような雰囲気。こんな雰囲気を好む人物も、そういないだろう。

克弥もこの雰囲気は嫌いだった。というより、彼は桃が落ち込んでいる、ということが嫌だった。何故だか分からないが、子供の頃から、それが一番嫌なことだった。

克弥は桃が持ってきたクラブ設立申請書を何気なく見直す。すると、あることに気付いた。

「おい、桃」

「克弥、すまない……ボクが完全にうつかりしていた……」

「聞け、っていうか見る、これ」

申請書を桃に手渡す。

「なんだ？ 何があるんだ？」

「これ、申請者も人数に含めていいんだろ？ だったら、お前も人数に含めるよ、っていうかそもそも自分を人数に入れ忘れてんだろ？」

「……………」

しばしの無言の後、桃は克弥の手を取り、

「克弥、ありがとう！！」

満面の笑みで、礼を言った。

そのさっきまでとはまるで正反対な嬉々とした表情を見て、克弥は照れ隠しに顔を背ける。

「遊理にも迷惑かけたな！一緒に野球できないのは残念だが、同じ球技をするもの同士、頑張っていこう！」

「あ、ああ……」

今度は遊理のほうに向き直り、握手を求める桃。遊理は突然の激励に少し困惑しつつも、その握手に応える。

「さあ、後は名前を書いてもらうだけだ。まずはボクが書いて、その後、適当に回していくぞ」

そう言っつて、鼻歌を歌いながら、申請書に名前を書く桃。

そのあまりの上機嫌っぷりを見て、克弥は、

(……やれやれ……)

と、昔からどこか抜けている幼馴染に呆れる。

しかし、その顔は微笑を浮かべていた。その克弥の様子を見た雪華が、にやにやしなから克弥に話しかける。

「申請書のこと、言わなかったら参加しなくてすんだかもしれないのに。もう、決定事項みたいよ。かつちゃんが参加すること」

「……まあ、いいさ。どうせ暇だしな」

「暇だから、ねえ」ほんとにそれだけかしら？」

「……それだけだよ」

克弥はぶつきらばうに返す。何かを勘繰っているときの雪華と話す、誘導尋問などの話術のオンパレードで彼女の望む答えを引き出されるので、そのまま会話を打ち切る。

そして、克弥は、桃に気になったことを尋ねる。

「おい、桃。人数はいいとして顧問はどうすんだ？」

すると、桃は、

「それに関しては当てがある。昼食の後、これに名前を書いた奴は少し付き合ってくれないか？」

と、答え、同行を求めてきた。同時に克弥に申請書を渡す。

「……まあ、いいけど……」

申請書を受け取り、一応、承諾する克弥。遊理以外の全員も頷いて答える。

当てとはいったい誰のことなのか。克弥は気になったが、答えが出るものでもないので途中で思考をやめて、申請書に自分の名を書くことにした。

「さあ、急いで食事を済ませよう!」

そう言つて、桃は凄い勢いで弁当を食べ始めた。

誰よりも遅く来たのに、誰よりも早く食べ終わる女、それが和田桃だった。



## 五章 顧問就任交渉（前書き）

長いので、短く区切りました。

## 第五章 顧問就任交渉

昼食を食べ終えた克弥たちは、桃に連れられ、とある場所にやってきた。

国語資料室というプレートがかかっている部屋だ。文字通り、国語の授業で使う資料が保存されている部屋だが、むしろ国語教師の待機所として扱われている。

「……まさか、原先生に顧問を頼むのか？」

「その通りだ」

克弥の言葉に、頷く桃。

「大丈夫なのか？ あの先生、野球に興味があるようには見えないし、確か、新聞部とかそんな部の顧問をしてる、とか言ってなかったか？」

「顧問の掛け持ちは許されている。問題はない。それに、野球に興味がないわけでもないぞ。むしろ、熱狂的なファンだ」

「ほんと？ 意外ね」

雪華の言葉に全員が頷く。原先生のイメージに、野球の熱狂的なファンという情報がどうにも適合しなかった。

「っていうか、なんでお前がそんなこと、知ってんだよ？」

「あとで話してやる」

克弥の質問にそう返して、桃は部屋のドアをノックする。

「失礼します」

そう断ってから、ドアを開ける。

資料室の中には、自分の席に座り、お茶を飲んでいる原先生しかいなかった。

「あら？ 和田さん？ 何か用かしら？」

原先生が用件を聞いてくると、桃は先生の席まで近づいていき、クラブ設立申請書を机に置き、単刀直入に告げる。

「先生、五人集めてきました。これで顧問になってくれるなら、約

束どおり……」

「あら、ホント？」

原先生が机に置かれた申請書を確認する。桃は、いまだ資料室の外にいる克弥たちに中に入ってくるよう、合図を送る。

克弥たちは合図に従い、準備室に入る。すると、原先生が申請書から目を離して、克弥たちに視線を向けた。

「いつもの仲良しメンバーね。西岡くんがいないみたいだけど」

入学わずか一週間で仲良しグループとして名前を覚えられるほど、克弥たちは目立っていたらしい。

「遊理は野球部に入部済みだったので……」

「そうなの？ まあ、五人いることには変わりないからいいんだけど。じゃ、私の名前も書いちゃうわね」

原先生が申請書の顧問の署名の欄に自身の名前を書こうとペンを探す。

その間に、小声で克弥は桃に疑問をぶつけた。

「どういうことだよ？ 約束どおりって……約束ってなんなんだ？ っていうか、何でそんなに原先生と親しいんだ？」

「簡単な話だ。ボクと原先生が始めて出会ったのは、学校ではない。今年の四月五日の、東京瓦版ラビッツ対阪神ライガースの開幕戦の球場観客席だ」

「……野球場で？」

「ああ。偶然、席が近かったので話をしたら、意気投合してな。まさか、この学校の教師とは思っていなかったが……」

偶然とは凄いものだな、一人で感心している桃。

「これがボクと先生が親しい理由だ。約束というのは」

桃が説明を続けようとしたそのとき、

「はい、書けたわ。後はこれを生徒会に提出すれば、クラブとして承認されるわ。部室とか活動場所についてのことも生徒会が説明してくれるわ」

ちようど署名し終えた原先生が、申請書を桃に返してきた。

「ありがとうございます、原先生。では、お礼のほうを……」  
そう言って、桃はどこからともなく野球ボールを取り出した。

この場にいた誰もが、どこに隠し持っていたかを見破ることが不可能な、マジシャン並みの鮮やかな手並み。野球においては、隠し球で使えるかもしれない技術だ。

つつこみのタイミングを見逃した克弥は、とりあえずそんな感想を抱くしかなかった。

「ほ、本当に貰っていいの？ 和田さん」

頬を紅潮させながら、桃にそう尋ねる原先生。

「ええ、父も気にしていないので、遠慮なくどうぞ」

そして、ボールを原先生に手渡す。よく見ると、ボールには何か書かれている。

「これが、和田栄治の一〇〇勝達成の記念ボール……サイン付き……」

ボールを手にした原先生は、うつとりしながらボールを見つめている。

「……ってあれ、お前の親父さんの記念ボールか？」

原先生の呟きの意味に気付いた克弥は、桃に小声で問い質す。

「そうだ。原先生はボクの父の大ファンらしくてな。顧問を引き受けてくれるなら、お礼にサイン入り記念ボールを譲る、と約束していたんだ」

なるほど、これが約束か、と克弥は納得した。

「そういえば、桃っちのおっちゃんってプロの投手やってんな。すっかり忘れてたわ」

何気なく言った恭一郎のその一言に、

「……なんだと？」

過剰な反応を見せる原先生。ギラリ、と恭一郎を鋭くなった目つきで睨みつけ、叫ぶ。

「あの伝説の大投手、和田栄治を忘れていただとおおっ!!」

「ひいつ!?!」

そのあまりの迫力に恭一郎が思わず悲鳴を上げるが、そんなことには構わず、怒涛の勢いでまくしたてる原先生。

「甲子園でノーヒットノーランを三度も記録し、鳴り物入りで東京瓦版ラビッツに入団！ ルーキーイヤーから先発ローテーションの一角を担い、その年に二〇勝を達成！ 肩を壊して引退するまで、十年連続で二〇勝以上を達成し続け、通算成績二〇六勝五八敗の現代の大投手だぞ！！ その大投手を忘れていただとおおおっ！！ ふざけるのは顔とテストの点数だけにしろおおおっ！！ 今から、いかに和田栄治投手が素晴らしかったか、とくと聞かせてやる！ そこに直れえっ！！」

「ひいひいひいっ！！」  
口調まで変わっている原先生の勢いに涙目になる恭一郎。その態度の豹変振りに、

「確かに、熱狂的な野球ファンだな。っていつか、さり気に酷いこと言ってるし……」

と、克弥は思わず納得する。

「よし、顧問も決まったことだし、教室に帰るぞ」

「そうね、もうすぐ予鈴もなるし」

そして、捕まっている恭一郎を無視して、桃と雪華は資料室を出て行くこうとする。

「えっ？ あ、あの……いいんですか？」

蓮乃が恭一郎の心配をするが、

「大丈夫だ、次の授業までには帰してもらえるだろう」

と、桃は何の根拠も無い一言を放ち、蓮乃を連れ出す。

「あああああっ！！ 見捨てないで、みんなあああっ！！ せめて、かつちゃんだけは残ってえええっ！！」

絶叫して懇願する恭一郎を見ながら、克弥は手と手を合わせて、

「ご愁傷様です」

とだけ告げて、資料室を立ち去った。

「いやあああっ！！ 裏切り者おおおっ！！！！」

「さあ！　まずは高校時代の伝説から話さねばな！！　脳髓にまで染み渡らせてやるからありがたく聞けええっ！！」

そんな声が、資料室のドアを閉める直前に聞こえてきたが、無視することにした。

「っていつか、あんな裏取引みたいなこととしていいのか？　しかも一〇〇勝したときのボールなんてめちゃくちゃ大事なもんなんじゃない……」

克弥が、桃と原先生の約束という名の取引とボールについて言及するが、

「問題ない。あれは、父が熱烈なファンに贈った品を、ボクが渡しただけだ。それに親父殿は記念ボールとか、そういうことにはあまり興味がない。飾りもしないでその辺にほったらかしだからな。大切にしてくれる人に譲ったほうがボールも喜ぶ、と本人も言っていた」

どうやら、約束についてはそういうことになっているらしい。それ以上、克弥は何も言わないことにした。

「では、ボクは今から生徒会室に申請書を届けてくる。お前たちは先に戻っておいてくれ」

そんなことを言って、桃は一人、生徒会室のある三階に向かおうとする。

「ああ、言い忘れていた」

しかし、急に立ち止まり、

「届けた今日の放課後から活動ができる。だから、授業が終わったら全員教室に残しておくように！　以上だ」

そんなことを言った後、スキップをしかねないくらいの上機嫌で、生徒会室へと向かっていった。

「……本気かよ？　甲子園目指すだの、新たな歴史を作るだの……」  
「本気に決まってるじゃない。ピーチちゃんはいつでも本気なんだから」

克弥のため息交じりの一言に、雪華がさも当然、といった感じで返す。

「フーか、お前ら、ホントにいいのかよ？ あいつのやりたいことに振り回されるだけだぜ？」

「いいのよ、ピーチちゃんといると、私は楽しいから」

「……私も、いいんです。桃ちゃんの夢が叶うなら、微力ながら、協力します」

どうやら、お人好しばっかりが桃の周りには集まるらしい。

「そういつかつちゃんこそ、どうなのよ？ 多分、一番大変なことになるのはかつちゃんよ？」

雪華の言うことは、全くその通りなことで、桃が何かをやると、必ず一番迷惑を被るのは克弥である。これは、彼らの十年以上に渡る付き合いから得られた、絶対の真実である。

それでも、克弥は桃に付き合う。なぜなら、

「……俺が犠牲になりや、他に被害は出ないんだ。大きな被害を周りに出すくらいなら、俺に迷惑かけていてくれ」

克弥は自分の健気さに、思わず涙しそうになる。紛うことなき自画自賛である。

そんな克弥を、雪華と蓮乃はなんだか生温かい目で見ている。

何かを見透かされているような気がした克弥は、その視線から逃げるように教室に戻るようになった。

その後、教室に戻った克弥たちは、本鈴直前に、へろへろになって戻ってきた恭一郎に恨み言を聞かされることになるが、全員が聞き流した。

## 第六章 初めての部活動

「では、これから『ニューベースボールクラブ』の活動を始める！」  
「おおおおっ！」

放課後の教室で桃の宣誓が響き渡ると同時に、雪華、恭一郎からは大きな歓声、蓮乃からは拍手が送られた。

唯一、克弥だけは、憂鬱そうにため息をつく。教室に残っているのは、この五人だけだった。

「まずは部室を決めなくてはならないが、これについては顧問の原先生に頼んであるので、問題ない。明日には、決まっているだろう」  
原先生とはそんな密約も交わしていたらしい。桃は黒板に『部室、問題なし』と書き、席に座る克弥たちに説明を続ける。

「次に練習場所が必要だが、あいにく大グラウンドは使用するクラブはたくさん存在しているので、使えない可能性が高いらしい」

この学校には、大グラウンドといわれる、体育の授業や一部の部活動など多目的に使われるグラウンドと、野球部やサッカー部などの大規模な部に与えられる専用グラウンドに分かれる。

部活動に力を入れているだけあって、そういうことには金に糸目をつけていない。

克弥たちは事前に桃から手渡されたプリントを見る。

生徒会からクラブ設立の承認を得た際に、グラウンドを使用するクラブの一覧をリストアップしてもらったものらしい。

「ていうか、マジで多いな、うちの学校のクラブって……運動部だけで三〇くらいあるやん」

「しかもなんだよ、鬼ごっこ部とか。それだけを毎日やるのか？  
変なクラブだ……」

子供の遊びが部活名となっているクラブを見つけ、克弥はこの学校のクラブ認定の基準はどこかおかしい、と感じる。

「ああ、その鬼ごっこ部、部員数五二名の大所帯らしいぞ」



「この学校、本当に高校!？」

桃の説明に思わず、自身が通う学校に本格的な疑問を抱いてしま  
う克弥。

「ただ、四九名が幽霊部員らしいがな」

「鬼はそいつらを先に捕まえるよ！ むしろ残った三人が鬼で、そ  
いつらが逃げ役だろ!！」

「そうすると、ゴーストバスター部とかに名前を変更するべきね」

「その前に廃部になるわ！ そんなクラブ！ っていうか今すぐ廃  
部にしろ!！」

「ゆ、幽霊を捕まえるには、やっぱり掃除機が必要ですよな?」

「何で兄じゃなくて弟が主人公なマイナーゲーム思い出すかな！

マンマミーヤ!！」

「すげえなあ、かつちゃん。そんなにツッコミばっかしてて疲れへ  
ん?」

「そう思うなら遠慮なく代わってくれよ！ 似非関西人!！」

ハイテンションでツッコミを入れまくった克弥だったが、さすが  
に疲れたようで、肩で息をしている。そして、似非と言われた恭一  
郎は「エセじゃないやい、ちゃんとした二代目関西人だ!……」と  
小声で訳の分からないことを呟きながら、しょぼくれている。

「話が逸れたな、元に戻すぞ」

桃が咳払いを一つして、黒板に何かを書き出す。

そこには、火の玉を投げ出す赤い帽子を被った配管工の髭親父が  
描かれていた。

「こんな魔球を投げられるようになるにはどうしたらいいのか」

「待て。話が発展している上に、ごちゃ混ぜになってんぞ」

「簡単よ、ピーチちゃん。ファイヤーなお花を取ればいいのよ」

「話に乗るな！ 帰ってこれなくなるだろ！ 元の話に!！」

「あ！ 桃ちゃんに姫をつけると、あのお姫様に」

「乗るなって言ってるのに何で乗っちゃうんだ!? でも、それは  
俺も思っていた!！」

二度目のハイテンションツッコミでさすがに疲れて、先程よりも肩で大きく息をする克弥。

しかし、そんなことには構わず、桃たちは喋り続ける。

「ふむ、ボクがお姫様か。満更でもないな」

「まさかピーチちゃん……白馬に乗った王子様を待ってるのか!？」

「いや、むしろ白球をぶん投げる王子様がいいな、一時期、流行ってたろ？ ハンカチ王子とか」

「も、桃ちゃんらしいですね……」

穏やかな空気が流れる、放課後の教室。

全く進まない部活の話。

(ああ……誰か……)

俺の代わりに、あいつらを本来の目的を思い出させてやってくれ……。

疲れ果てて諦めムードな克弥の願いは、空へと消えるはずだった。しかし、

「任せとけ、かつちゃん!」

救世主は現れた。

「俺はツッコミも出来る立派な関西人やってとこ、思う存分見せる!」

そう息巻いて、救世主こと恭一郎は、桃に詰め寄る。

(……恭一郎のことだ、くだらないボケで場を白けさせるくらいしか出来ないだろうが、白けたムードになれば、話も元に戻せるかもしれない!)

克弥は、恭一郎に全く期待をせず、ある意味では期待をして、状況を見守ることにした。

「おい、桃っち!」

「なんだ？ 恭一郎」

「そろそろ本題に戻ったほうが、ええんとちゃうか？ このままやと雑談で終わってまうで」

(っ!？ 恭一郎がまともなことを言っている!?)

地球を滅亡させるだけの質量をもった隕石が落下してきたような衝撃を、克弥は感じた。いや、実際そんなものを喰らったことはないので、大げさすぎる喩えではあるが、恭一郎と十年以上付き合ってきた克弥にとって、それぐらい衝撃的なことだった。

そして、同じく十年以上の付き合いがある桃、雪華、蓮乃にとっても、克弥と同等の衝撃があつたらしい。口を顎が外れるのではないかと、と思えるほど開けて、驚愕の表情を見せている。

「恭一郎にまともなことを言われるとは……なんかむかつくな」「そうね、他の誰になら言われてもいいんだけど恭ちゃんにだけは、ねえ……」

「ふ、二人とも失礼だよ、いくら本当のことでも、そんなこと言っちゃダメ……」

「いや、正直一番きついこと言ったのは、蓮乃ちゃんや……」

三人からの散々な評価に、精神的なダメージで息も絶え絶えな恭一郎。

「しかし、恭一郎の言うことはもつともだ。話を進めよう」「そう言つて桃は、真面目な顔になる。

「練習場所の話だったな。これに関しては、実は今から、グラウンドを使っている部に交渉にいかうかと思っている」

（おお！ 本当に話が進んだぞ！）

恭一郎でも役に立つことがあるもんだ、と克弥は恭一郎を見直す。「……みんな、俺のこと、なんやと思つてたんや……」

しかし、当の恭一郎は、自分に対する幼馴染の評価の低さに、まだ絶望している。

そんな恭一郎を無視して、話は淡々と進む。

「では、行くとしよう。交渉相手はもう決まっているんだ。悪いが、みんなもついてきてくれ」

「分かつたわ」

桃の言葉に雪華が頷き、席を立ち、それに蓮乃も続く。そして、女三人はそそくさと教室を出て行った。

「……おい、恭一郎。置いてくぞ」

いまだ、シヨックから立ち直れず、床に『の』の字を書きながら拗ねている恭一郎に、克弥は一応、声をかける。

「は……ええんや、どうせ俺なんか、いつもふざけてればいいんやろ？」

自暴自棄になって、立ち上がるうともしない恭一郎。

その態度がうざくて仕方なかったので、

「んじゃ、先行くから。あと、あれはツッコミじゃなくて、ただの注意だからな」

克弥は恭一郎を見捨てて、教室を出た。ついでに、ダメ押しでツッコミも入れておく。

「ちよつと！俺に冷たすぎやしませんか！？もうちよつと優しくしてくれてもええとちやうかな!？」

本質的に寂しがり屋な恭一郎は、慌てて克弥たちを追いかける。

しかし、克弥は後ろから聞こえてくる慌ただしい足音のことより、桃が交渉相手に選んだ部とやらが気になっていた。正直、悪い予感しかない。

(厄介事が起こらねえといいいんだけどな……)

克弥はそんな希望を抱きつつ、桃たち追いかけた。

## 七章 舌戦（VS監督）

「失礼しまああああすつ！！！」

雄叫び、といつても差し支えのない、桃の大きな声がグラウンドに響いた。

グラウンドを使用している生徒から、注目の視線が集まるが、生徒たちはすぐさま、自分たちの練習に集中し直す。

グラウンドといつても、大グラウンドではない。とある、専用グラウンド内だ。

「……そんな大声を出さなくても、聞こえている」

不機嫌を丸出しで対応するこの人物は、その専用グラウンドの主とも言える存在である。

その人物とは、

「それはすみませんでした、ほしの星野監督」

志士高校野球部監督、ほしのまなし星野将志監督である。

この志士高校出身で、野球部のエースとして甲子園に出場し、決勝まで勝ち進んだが、そこで敗れたという経歴を持っている。だが、プロには行かず、大学で教員資格を取り、幾つかの高校を経て、この学校に教師兼野球部監督として帰ってきた人物である。

四十歳ながら、その風貌は歴戦の老兵といったような凄みを醸し出しており、厳しいと評判の指導で野球部部員以外にも、その存在感を示している。

彼が監督になってから三年、地区優勝すら困難になっていた志士高校を建て直し、去年は甲子園出場にまで導いた名将である。

そんな名将に、何の恐れもなく、ただ自然体で話しかけることができるバカは、そんなに存在しないだろう。

しかし、ここに一人、しっかり存在している。

「では、いきなりですが、用件を言わせていただきます」

あくまで自然体で桃は話す。桃の後ろには、克弥、恭一郎、雪華、

蓮乃が控えているが、完全に怖気づいており、桃の後ろへ順番に隠れてしまっている。

「っていうか、何でわざわざ野球部に専用グラウンドを借りようとしてんだ!？」

「鬼ごっこ部でええやん! グラウンド借りるだけなら!」

「ピーチちゃんのことだから、野球に関する事は野球部に頼むって思考なのよ、きつと」

「そ、それに失礼ですよ、星野先生に対してこんな態度……」

ぶつぶつと小声で文句を言いながら、桃の後ろで拳動不審になっている四人。

しかし、桃はそんな文句に耳を傾けず、ただ冷静に、大真面目に「グラウンド使用権を賭けて、我がニューベースボールクラブと試合をしていただきたい」

全員の予想を飛び越える一言を、言い放った。

「……んなつつ!!?!」「」「」

四人の驚きの声が重なる。

「お、おまつ! 何言ってるんだ」

その驚きを代表して、克弥が桃に抗議の声をあげるが、桃は手を克弥に向けて突き出すと同時に、目でも「黙っている」と告げて、克弥を押し黙らせる。

「試合? 君たちと?」

星野監督の鋭い眼光が、桃を射抜く。その圧倒的な迫力は、視線を向けられた桃以外の全員をも緊張させた。

「ええ。ボクたちと、です」

しかし、桃は怖気づくことなく、はっきり告げる。

「ボクも野球部に選手として入りたかったのですが、以前、あなたに断られてしまいました。なので、自分から女子も参加できる野球部 ニューベースボールクラブを立ち上げたのですが、練習する場所がないのです。そこで、野球部の専用グラウンドをお借りするための交渉にここに来たんですが……」

桃は、野球部の練習風景を一瞬眺め、星野監督に言い放つ。

「どうせなら、強い部が使っべきだと思って、提案してみました」  
「……………!!!」「……」

「……」

「……」

星野監督は、表情を全く変えずに、桃の提案を聞いている。

桃の鉄面皮な態度に対して、監督は鉄仮面を被ったようなポーカ  
ーフェイスで対応した。

「面白い案ではあるが、そんなことが許されるとでも思っているの  
か？ 私個人で決められるものではないし、決めてはいけないこと  
だ。こちらの選手たちは真面目に練習しようとしているのだ。君た  
ちのお遊び部活に付き合う暇はない」

「……」

「……」

「逃げるんですか？」

桃は、挑発気味にそう告げた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「その敬遠されたバッターは、ボクの父ですから」

魔法のように、外されることになった。

驚きの表情を見せる星野監督に、克弥たちも驚く。

今まで、表情というものを見せなかつた監督がそれを見せたこと、その原因が桃の父親にあることの二つに驚いたのだ。

「君が……和田の娘……？」

「和田桃です。以前も名乗ったはずですが？」

星野監督は未だに、驚きの表情を浮かべながら、呆然とし始めた。「ああ、あれか、二十三年前の甲子園決勝、この高校との対戦で桃っちのおっちゃんノーヒットノーランを達成したときの試合のことか……」

なにやら、ぶつぶつとそんなことを恭一郎が語り始める。

「なんでお前がそんなこと、知ってたんだよ？」

克弥が恭一郎に問いかける。

「昼休み目一杯使つて、教え込まれたからな、桃っちのおっちゃんの凄さ……」

遠い目をして、活力なく答える恭一郎。どうやら、昼休みの原先生の教育的指導で身についた知識らしい。

「桃っちのおっちゃんは打者としても優秀らしくて、その試合の第一打席で、ホームランを打ったそうや。その後の三打席は全部敬遠その結果、両チームそのホームラン以外のヒットは出ず、桃っちのおっちゃんもフォアボール一個与えただけで、そのまま優勝を決め」

虚ろな目で聞いてもいないことをぺらぺら喋りだす恭一郎をとりあえず無視して、克弥は桃と星野監督のほうに目を向ける。

星野監督もまさか、過去に対決した選手の娘に出会うことになり、さらにその娘に、野球でケンカを売られるとは思ってもしなかつたのだらう。そんなことを予想できる人間は、予知能力を持っているとしか考えられない。

「あの試合のとき、観客からかけられた罵声の言葉は『勝負しろ！』」



だったんじゃありませんか？」

失礼にも程がある質問をする桃。

しかし、星野監督は黙ったままだ。

「時が流れ、あなたはあの和田という男の娘に、野球で『勝負しろ！』と言われているわけですが」

黙ったまま、なおも呆然としている星野監督に、桃が再度、尋ねる。

「また、逃げますか？ 星野監督？」

「っ！ 桃っ！！」

無礼すぎるにも程がある一言。さすがにこれは不味いと、克弥は桃に注意する。

しかし、桃は克弥のほうを見ようとせず、ただ、星野監督を見つめていた。

そして、桃の一言で我に返った星野監督は、怒りを表すかと思いきや、咳払いをして調子を整え、またも、鉄仮面を被る。

「……君の挑発には乗れないな。私事を部活動に持ち込んで、監督として失格だ。部員に示しがつかない」

(ん?)

しかし、その監督の発言に、克弥は違和感を覚えた。

(公私混同できないから、挑発に乗れないってことは……ひょっとして )

監督自身は、勝負したいのか？

と、思ったのは克弥だけではなかったようで、

「では、部員も納得済みの試合であれば、受けてくれるのですか？」

すかさず、桃がそう質問した。

「……学校側の了承も必要だ。さすがに私だけの権限で、専用グラウンドの使用権の譲渡など不可能だ。野球部が使用するための専用グラウンドだからな。……それだけ条件を整えば、やってやれんことはない」

（やる気満々じゃないですか！ 監督っ！）

思わず、噴出しそうになる克弥。

厳格で恐ろしいイメージしかなかった星野監督だったが、何のことは無い。彼は今でも負けず嫌いな野球好きだったのだ。それも、桃と変わらないくらいの、野球バカだ。

他の三人も同じようなことを思ったようで、恭一郎と雪華は克弥と同じように笑いを堪えるような仕草を見せ、蓮乃は驚いた表情を見せている。

「……では、使用権ではなく、優先権を賭けての試合ならば、どうですか？ 勝ったほうが優先的に使用できる、ってことなら、監督の権限でもなんとかなるんじゃないですか？」

ここで、桃は更なる提案を申し出る。

一見、譲歩したように聞こえなくもない発言だが、中身はとんでもなく、自分たちに都合の良い様に出来ている。

どちらの部も使うことが出来る、つまり、野球部が使用することもある、という名目があれば、専用グラウンドの使用に関しては、星野監督が自由に決定できる。

つまり、野球部がグラウンドを使用しない日があっても構わないし、使っていない専用グラウンドを、他の部に使用させることもできる。

本来は、野球部が持つこのグラウンドの使用決定権を、形式上は野球部に保持させつつ、実際の決定権はこちらが保持する、というのが桃の提案である。

これならば、見かけの上では、星野監督のグラウンド使用権の範囲で決定できる事項になることになる。

（バカのくせに野球が絡むと悪知恵の回るやつだよ、本当に）

昔からの幼馴染の特徴を、克弥はそう評して、ため息をつく。

「……問題はないな。形の上では」

「では、後は部員の納得ですね」

監督の言質をとるや否や、桃はどこからともなく自らのクラブを

取り出し、装着する。

いったいどこから取り出したかなど、もはやどうでもいいことだと克弥は無理やり気にしないことにする。

そして、桃は堂々と、野球部部員たちが練習しているところまで歩いていき、転がってきたボールを拾い上げた。

「ん？ おい、君。危ないぞ、っていうかここは野球部以外、基本的に立ち入り禁止」

注意をしてきた部員を無視し、桃はいきなり、投球モーションに入る。

「っなっ！ ちよっ！？」

注意をした部員は、突然の桃の行動に驚き、桃の正面から退く。

これで桃の前には、五〇メートル以上先にある、防球のためのフェンスしかなかった。

部員たちの注目が謎の行動を起こす女子 桃に集まり始める。

そして、桃は思い切り、真正面にボールを投げた。

ボールは一直線に、フェンスに向かって放り出され、

そのまま、地に着くことなく、フェンスにぶち当たった。

それを見ていた野球部部員たちは啞然とする。

「化け物か、あの女……」

そんな呟きも心なしに聞こえた気がした。そして、克弥はその呟きを全力で肯定する。

どこの世界に、ほぼ直線軌道で五〇メートル以上の遠投をこなす女がいるだろうか。

(そういえば、中学の頃に遠投七〇メートルくらい記録していたな……)

桃の怪物じみた中学の頃の伝説を思い出しながら、克弥は考える。(どうやって、了承を取る気なんだ?)

いきなり、野球部の練習場所にやってきて、グラウンドを賭けた試合をしよう、などと言っても、笑い飛ばされるのがオチである。

桃がどうやって、部員たちの了承を得るのか、正直興味があった。

(これだけのパフォーマンスをやったんだ。何か策があるのかも…)

いつもはバカだが、野球が絡むと驚異的な悪知恵の働く桃のことだ。なにかしら、策を考えていてもおかしくはない。

やがて、桃は野球部部員たちに向かって、はっきりと告げる。

## 七章 舌戦（VS監督）（後書き）

これからも不定期な更新になりますが、なにとぞお付き合いください。

今回は十一月のうちには掲載したいと思っています。

## 八章 舌戦（VS野球部部員）

「ボクと野球をしよう！」

桃から発せられた言葉は、これだけであった。

克弥は己の深読みを恥じた。こいつはバカ、基本はバカなんだ、と桃の本質を再度、認識しなおす。

雪華たちも桃の一言で呆気に取られている。身内ですらこんな反応なのだから、野球部の部員たちは言葉無く立ち尽くすしかない。

しかし、そんなことは全く気にせず、桃は言葉を続ける。

「野球部が攻撃、ボクたちニューベースボールクラブが守備で一回のみの真剣勝負だ。ボクが一点でも取れたらそちらの勝ち、無失点でスリーアウトを取ればボクたちの勝ち。ボクたちが勝つたら、このグラウンドの優先使用权を貰う。そちらが勝つても、こちらから与えられるものは何も無いが、その埋め合わせとして、ハンデをつけよう！ ボクたちの守備は外野無しで行う！ そういうルールで野球をしよう！」

勝手にベラベラ喋りだす桃に、やがて正気を取り戻した部員の一人が注意する。

「な、なにをいきなり！ 勝手にやってきて、勝手に勝負吹っかけるってどんな神経してんだよ！」

「ごもつともな言葉だ。こちらとしてはぐっの音も出ない。」

克弥はそう考えるが、どうやらこちらの部長様はそんなことは気にしていないご様子である。

「ボクの球もまともに打てないようじゃ、甲子園なんて夢のまた夢だ。自分たちの実力に自信が無いのなら断るがいい」

またもや、挑発。監督を散々挑発した後は、今度は部員を挑発するという、人の神経を逆撫でしかない桃の言動に、克弥はそろそろ頭が痛くなってきた。

「うるせえよ！ そんな勝負、受けるわけが  
「俺は受けてもいいと思うぞ！」

当然、断られると思っていた桃の挑戦。実際、部員の一人が断りの言葉を発しようとしたそのとき、はつきりと通る快活な声がそれを遮った。

その場にいた全員がその声の主に注目する。

「み、宮本キャプテン!?」

野球部部員からそう呼ばれた男が、桃に近づいていく。

「さつき君の投げた球は素晴らしかった！」

まるで、炎が灯されたような、暑苦しさをすら感じるキラキラとした瞳を桃に向けながら、そんな言葉を返した男が、どうやら野球部の部長　キャプテンのようだ。

容姿は、まさしく、高校球児、と言われて一般人がイメージするようなものだった。

坊主頭で、真っ白な歯がこぼれる、爽やかな笑顔を浮かべている。肌は日焼けしているのかもともなのか黒々としており、スポーツマンという印象しか抱けない。

そんな男が、桃の無茶苦茶な挑戦を受けてもいいと言っている。

「きや、キャプテン！ 受ける必要なんてないですよ！ 俺たちは夏に向けて練習しなきゃなんないんだから、こんな変な奴の言うことなんか無視すれば」

「田中、お前、彼女の球を打てるか？」

当然とわかっていいほどの抗議を部員から受けるが、宮本キャプテンはその抗議を遮り、部員に質問する。

「な、なんで、そんなこと」

「いいから。打てるか？」

自分の質問に答えさせようとする宮本キャプテンのゴリ押しに、やや不満そうにしながらも田中と呼ばれた部員は答える。

「……打てない、ってことはないですよ。確かに球も速かったし、正直驚いたけど、所詮女子の球ですよ。あれくらいなら打てます」

その答えを聞いた宮本キャプテンは、今度は桃に、「うちの部員はこう言ってるけど……君はどうだい？ 彼を打ち取る自信はあるかい？」

と、尋ねた。

「勿論だとも。打ち取る自信がなくてこんな勝負、吹っかけるはずがない」

自信満々に桃は答える。

「ふふっ！ はははははははっ！ 君は面白いな！」

宮本キャプテンは、嘲笑ではなく、本当に楽しそうな笑い声を上げて、部員たちに語りかける。

「みんな！ 勝負してみようじゃないか！ 俺たちが勝てば、何も問題はない。お遊び部活の面白い余興だった、と、笑顔で彼女たちを帰してやればいい。女子の投げる球だぞ！ 打てないわけがない！ 二年生レギュラーである田中が打ると言っているんだ！ ここは一つ、野球部の器の大きいところを見せて、受けようではないか！」

その高らかな宣言に、開いた口が塞がらなくなる野球部部員たち。それは克弥たちにも言えることだった。

「こ、これ、どういう展開？ なんでこんなに桃うちの思い通りの展開になるんかが分かんねんけど……」

「奇遇ね……私もよ」

「え、ええつと……と、とりあえず試合はどうなるの？」

混乱の極みに達しているこの場の雰囲気、真っ先に破ったのは、

「そ、そんなの認められるわけがないじゃないですか！」

田中と呼ばれた部員だった。

彼は宮本キャプテンに猛烈な抗議をし始める。

「勝手に決めないでください！ いくらキャプテンでもこんな横暴は許されませんよ！」

「何だ？ 嫌なのか？」

「嫌とかそういう問題じゃなく！ こんな無意味なことに付き合う



意味はないと言っているんです！」

「お前が打てるって言ったんじゃないか。なら、打てばいい。それくらいの時間をとってもいいだろ？ バッティング練習だと思えば問題ない。それに明らかに俺たちに有利な条件じゃないか。内野を抜くどころか、外野フライでも俺たちの勝ちはず間違いない」  
「ぐっ……」

しかし、旗色が悪くなってきたようだ。

「か、監督がこんな勝負、許すわけ」

「悪いが」

田中の言葉を遮って、桃が話す。

「監督の了承は得ている。あとは部員の了承だけだ」

田中が更に苦しい状況になったようだ。

「ふ、副キャプテン！ こんなこと、許していいわけありませんよね！？」

ついに、田中は援護射撃を求めだした。

そして、話を振られた副キャプテンとやらは、

「あ？ いいんじゃない？ 俺は全然構わねえし」

見事なまでに無援護だった。

「ほ、他の奴ら、なあ、みんな！ い、嫌だよな！ こんな見返りのない試合」

「……見返りがほしいか？」

田中が最後に頼ろうとした多数決の利は、

「なら、くれてやる」

桃の次の一言であっさりひっくり返されることになる。

「ボクの父は、元・プロ野球選手の和田栄治だ。ボクたちに勝てば、父のクラブであろうがサイン入りボールであろうが、なんでもくれ  
てやる」

しん、と静まり返るグラウンド。

やがて、静寂はひそひそとした声により破られる。

「おい、マジか？ マジで和田栄治の娘なのか？」 「確かにこの辺

りに住んでるって聞いた覚えが……」「娘もいるって、聞いたことあるぜ」「じゃあマジなんじゃ……」「お、俺、クラブ欲しいな、超ファンなんだ」「待てよ！俺も欲しい！」「俺も、サイン入りで欲しいっ！」

そんな会話が周囲でなされている。そして、空気が明らかに桃に有利なものとなったことを克弥たちは感じた。

「お、おい、みんな……？」

可哀想なのは、その雰囲気の変化についていけない田中だ。

もはや、誰もが桃の勝負を受ける気になっており、彼のみが浮いた存在になってしまっている。見事なまでの孤立無援。いつたい、田中が何をしたというのだろうか。

「田中、受けていいよな！」

白い歯をキラリと光らせて、宮本キャプテンが追い討ちをかける。  
「……………勝手にしてください」

そして、ついに田中は折れた。気のせいか、涙目のようにも見える。

(哀れな……)

克弥は田中に対する同情を禁じえない。

なんとなく、自分と立ち位置が同じように思えたからかもしれない。

「ただし、一つ付け加えさせてください」

田中がそう言って、桃に向き直り、告げる。

「こんな勝負、何回も吹っかけられると迷惑極まりない。これつきりにしてもらってことで君たちが負けたら、君たちのそのクラブは廃部にしろ！」

負けたときの条件を付け加えられる形になるが、ある意味、当然のことである。

何度も再戦を要求されては、たまったものではない。田中の言い分はこちらとしても理解できる。

桃もそう考えたのか、

「分かった。その条件、飲ませてもらおう」  
あつさり了承することにしたようだ。

「と、いうわけで君の挑戦を受けるよ、可愛いピッチャーさん！  
ああ、俺の名前は宮本鉄人。みやもとてつひと野球部のキャプテンだ」

「ボクは和田桃。よろしく、宮本先輩」

宮本キャプテンは自己紹介も兼ねて、桃に了承の意を伝え、これを桃が受ける。

そして、話が纏まったとみて、星野監督が二人の傍に歩み寄り、桃に質問する。

「それで、いつが試合をやるんだ？　こちらは打順を組むべきなのか？」

「日にちはそちらが決めてくれて構いません。打順もそちらの自由。別にオーダー表を提出しろ、とも言いませんし、当日、一打席ごとにその場で決めてもらっても構いません」

桃の返事を聞いて、監督は少し考え、結論を出す。

「では、四日後の金曜日の放課後だ。その日が一番、都合が良い」

「分かりました。金曜日ですね」

「　って、ちよつと待て！」

簡単に承諾する桃に、克弥は思わず、声を出してしまう。

「俺たち、お前以外は……いや、お前も含めて、遊びでしか野球をしたことがないド素人だぞ！　守備だけとはいえ、四日で何をしろと！？」

その言葉を聞いた周囲の野球部部員はざわめきだす。

露骨な嫌悪を滲ませた視線、信じられないといった驚愕を含んだ視線、奇怪なものを見るような視線等、様々な視線に晒される克弥たち。

言葉を発した張本人である克弥は、その場の空気の変貌ぶりに、今更ながら後悔する。

今、この場で言うべき事ではなかった、と。

決して好意的ではない視線を受け、身体を震えさせて、雪華の後

ろに隠れる蓮乃。蓮乃を庇い、それらの視線が気に食わないと言わんばかりに、辺りにメンチを切り返す雪華と恭一郎。

まさに険悪といえる雰囲気の中、数々の視線もものともせず、桃はない胸を張って、克弥たちに告げる。

「問題ない。お前たちなら四日もあれば十分形になる」

自信が溢れ出さんばかりの発言に、その場の全員が虚を突かれる。そして、

「はあーっはっはっはっ！ やっぱ面白いな、君は！」

宮本キャプテンの爽やかな馬鹿笑いが、グラウンドに響いた。

あまりの大笑いに全ての毒気が抜かれてしまったかのように、がらりとまた空気が変わる。

「これで話はお仕舞いだ！ 各自、練習に戻れ！」

その変化を待っていたかのように、星野監督がタイミングよく指示を出す。指示に従い、野球部部員たちは表情を引き締め、自分たちの練習に戻っていく。

「じゃあ、試合、楽しみにしてるよー！」

宮本キャプテンも、遠足前日の小学生のようなキラキラした目で桃にそう告げた後、監督に一礼し、練習に戻っていった。

「よし、ボクらも引き上げよう。練習もしなきゃならないしな」

桃がそう言って、グラウンドから出ようとしたが、

「ああ、待ちたまえ」

星野監督に呼び止められた。

「君たちの顧問は誰だ？ 君たちが負けた場合、廃部ということになると、了承を取っておくことが必要になる。それに、そもそもこの試合のことを確認する必要もある。顧問が了承しなければ、この話は破談ということになる」

この話を聞いて、克弥は内心焦っていた。

顧問の原先生にこんな試合をすることを、桃が伝えているとは思えなかったからである。

しかし、そんな心配をよそに、

「顧問は原先生です。試合の了承は得ています」

桃は簡単にそう答えた。

「そうか、分かった」

星野監督は桃の言葉に頷いて、

「では、君たちも戻りたまえ。なんなら、見学でもしていくかね？」

邪魔さえしなければ自由にしてくれて構わんよ」

克弥たちから離れ、部員の指導に向かった。

## 八章 舌戦（VS野球部部員）（後書き）

次回更新は一月になるかもしれませんが。申し訳ないです。

活動報告にたまに何か書き込んでいます。よろしかったら、たまに覗いてください。

## 九章 彼は何処？

一旦、グラウンドから出た克弥たちは、桃以外の全員が盛大なため息をついた。

「首尾よく試合の日程が決まったな。これから忙しくなるぞ！」  
当の桃はやる気満々、気合十分といった様相で息巻いている。

しかし、他の四人は疲れた顔をして、再度、ため息をつく。  
「生きた心地がしなかった……」

ぼそりと克弥が漏らした一言に、同意する三人。

「ピーちゃん、あんなことやるなら、最初からやるって言うておいてよ。そしたら、こんなに驚きもしなかったのに」

「待て。言っただけで止めるだろ。受け入れる気か、あの暴拳の数々を」

相変わらず、ずれた観点で会話する雪華に、桃の親友たる所以を感じる克弥。

「……ていうか、いつ原先生の了承を取ってたんだ？」

克弥が疑問を口にすると、桃は何故か携帯を取り出した。そして、なにやらメールを打ち出し、送信した。

「今だ」

「……………は？」

「今、試合のことをメールに打った。了承は返信待ちだな」  
なんだかとてもないことを言い出した。

「おまつ……順番が変わる！ どう考えても！」  
因果律逆転もいいところな桃の言動に、さっきまでの疲れも忘れ、勢いよくツッコミをいれる克弥。

「まあ、了承さえもらえれば問題ないだろ？ つと、返信だ」  
桃は克弥のツッコミにも大した反省を見せず、振動する携帯を開き、メールを確認する。

「……っていつか原先生のメアド、知ってたんや……」

羨ましそうに恭一郎が呟く。

「球場で出会ったとき、教えてもらったんだ。教えてほしいか？」

「是非に！」

「だが、断る」

恭一郎ががつくりと膝をつく。そして、本気で号泣。

そんなに教えてほしかったのか、と恭一郎の必死な姿に軽く引きながら、克弥は桃に尋ねる。

「それで、了承は貰えたのか？」

「ああ、『了解！ 好きにしてくれて構わないわ』とのことだ」

その報告を聞いて、さつきまでの疲れが戻ってきた気がした。またも、深いため息をついてしまう。

「し、試合するんですね、四日後……」

蓮乃が全員が抱いている不安を、代表するかのようにして桃に尋ねる。

「ああ。だから、これから忙しくなるんだ！」

桃は大分興奮しているようで、鼻息を荒くして答える。

そんな桃に、四回目となるため息をつきながら、克弥は忠告する。

「おい、さつきも言ったけど、どう考えても無茶だろ。俺たちやド素人もいいとこだぞ。お前は普段から鍛えてるから問題ないかもしれねえけど、俺たちには不安がありすぎる」

克弥の当然の意見に、桃は簡単に答える。

「大丈夫だ。お前たちには今日からボクの指導の下、ちょっとした練習をしてもらう。お前たちの運動能力は、長い付き合いのおかげで把握済みだ。この練習さえしてもらえば、お前たちの能力なら何の問題もない」

この野球バカは自分のこと以外に、幼馴染のことでも自信満々になれるらしい。

たしかに、雪華は文武両道で、女子とは思えないくらいに運動神経が良い。その能力を部活などに活かさないのは「興味がない」の一言に尽きるらしく、中学の頃は『万能の問題児』と言われていた。



恭一郎も運動部には面倒だから所属してないだけで、有り余る体力と運動能力を持っている。

この二人に関しては、百歩譲って、問題ないと言うことも出来るだろう。

しかし、克弥と蓮乃 特に、蓮乃に関しては意義を唱えざるを得ない。

克弥は桃に付き合っってよく野球をしていたという経験はあるが、雪華や恭一郎と比べると平均的な能力しか持っておらず、不安要素のほうが大きい。

蓮乃は運動音痴の鏡ともいえるくらい、運動を苦手に行っている。ドッチボールをすれば自らボールに当たりにいき、バレーをすれば顔面レシーブを披露、サッカーをすればホイッスルが鳴るまで自陣の端っこだおどおどしている、というように筋金入りである。

「あ、あの、私、試合に出ないほうがいいんじゃない……」  
今も自信なさげにこんなことを呟く始末である。

だが、桃は、

「大丈夫だ、蓮乃。ボクの言うとおりにすれば、問題ない。お前なら出来るさ」

このように何の根拠もなしに、蓮乃を励ます。

普通なら、こんな励ましを受けたら更に不安になるものだ。理屈も何もなく、ただ「大丈夫。お前なら出来る」と言われても、迷惑以外の何物でもない。

しかし、言われたことを何でも素直に信じてしまう蓮乃にとって、その励ましはとてつもない効力を示した。

「も、桃ちゃんがそう言うなら……頑張ってみます」

克弥は、この素直な性格が変わらないでいてほしいと思う反面、そろそろ疑うということを感じてほしいと思う。

「桃っち、試合をすんのはいいんやけど」

克弥がまるで蓮乃の父親にでもなったかのような考えを抱いている間に、恭一郎が手をあげて、意見を言う。

「俺ら、野球の道具　グラブとか持ってないんやけど？」

恭一郎の言葉は、克弥も桃に聞こうと思っていたことだった。

キャッチャーミットを持つ克弥はともかく、他の三人はグラブやスパイクを持っていないという、野球をやる以前の問題を抱えている。

さらに、問題はまだ残っている。

「あと、俺たちは五人しかいないんだぜ？　俺とお前でバッテリーを組むつもりなら、内野の残りのポジションは四つ。俺たちの残りは三人。ポジションも決めなきゃいけないし、その前に一人足りないのはどうする気だよ？」

克弥は恭一郎の質問の後、残りの問題であるポジションと人数のことを問う。この問題も野球をする以前の問題といえる。

「ふつ、克弥。ボクがそんなに考えなしに見えるか？」

なんだか偉そうに腕を組んで答える桃。

正直、考えなしと言うよりはノリだけで生きているような気がする、という本音は飲み込んで、桃の話の続きを聞く。

「道具に関しては問題ないぞ。ボクの家に来れば、その理由が分かる。だから、今から全員一旦帰宅して、ボクの家汚れてもいい動きやすい服装で集合してくれ。基本的な練習をしてから、守備のポジションや人数のことについてもそこで話そう」

そう言って、桃は「では解散！」と指示を出す。

なんとなく、問題を先送りにされたような気もしたが、後で話すというのだから、一応信用することにする。

だが、解散といっても同じバスに乗って帰るのだから、どうせ一緒の下校することになるという実質、意味の無いものだ。

そんなことを考えながら、鞆を教室に取りに行こうとした克弥に、桃が声をかける。

「ああ、忘れてた。克弥は野球部を見学してこい」

名指して何やら厄介なことを命令された克弥は、当然、意義を申し立てる。

「なんでだよ！ 理由を述べる！」

「情報収集だ。戦いにおいて重要なものといえば、今も昔も情報と決まっている」

野球に関しては本当にフル回転を惜しまない桃の脳内構造に呆れながらも、克弥は面倒なことをしたくない一心で抗議を続ける。

「だったら、お前がすればいいだろ！」

「ボクは今から雪華たちに道具を与える、基本的な動きを教えるなど用事が多い」

「うっ……」

克弥の旗色が悪い。先程の田中先輩と同じ状態になってしまっている。

そこに桃が止めを刺しにかかる。

「それにな、これはお前に適任の仕事だ、克弥」

「な、なんでだよ？」

「お前はキャッチャーだ。相手のことを知っておくのは当然のことだろう？」

桃の言うことはもつともである。通常、キャッチャーは相手バッターの情報を基にして配球を考え、ピッチャーをリードし、バッターを打ち取るのが仕事である。

しかし、克弥は、その通常のキャッチャーではない。

「俺はお前が投げる球を受けることしかやったことねえんだぞ！ 情報を基に配球を考えるなんて出来る気がしねえ！」

情けない言い訳をしていると、克弥は自分でも思うが、紛れもない真実でもある。

昔、桃に付きあわされ、子供同士で草野球をやったこともあるが、そのときも配球は桃が考え、自分は受けるだけだった。そんな自分が、甲子園に出場したこともあるバッターたちを打ち取るリードが出来るとは思えなかった。

それでも、桃は告げる。

「ボクの配球はいつでも強気すぎる。相手が相手だし、押し切るだ

けの野球が通用するとは思えない。お前が、ボクとは別の観点から配球を考えてくれることは、ボクにとって大きな助けとなる。だから、頼む、克弥」

克弥の目を真っ直ぐ見つめて、懇願する桃。

『お前の考えと違う球を要求したらお前のリズムが狂うんじゃないのか』、『俺のリードが間違っているかもしれないだろ』など、克弥に反論の手はいくらでもあった。

しかし、言えない。

昔から克弥は、桃のこういう眼を伴った懇願には弱い。

『お前を信じている』という期待と信頼が込められた、強い意思を感じさせる眼。

「……分かったよ！ 見学してくりゃいいんだろ！」

傍目から見ると、捨て鉢のようにも見える克弥の了承。

しかし、幼馴染たちは克弥の性格を熟知しているため、何も心配はしない。

「じゃあな、頑張れよ、かつちゃん！」

「私たちは先に帰っておくわね」

「あ、あの、頑張ってください！」

責任感の強い彼なら、しっかりやってくれるだろう、という信頼を激励に変えて、幼馴染たちは鞆を取りに、教室へと帰っていく。

「ありがとう、克弥」

桃がまた克弥の目を見て、礼を言う。

「……見学するのはいいけどよ、誰の情報はどうやって集めるんだ？ さすがに全員分、集めるには時間が足りないし、俺、野球部のレギュラーとかの名前と顔、知らねえぞ」

克弥は見つめられることの気恥ずかしさから視線を逸らして、桃に尋ねる。

「その辺りのことをよく知る人に教えてもらえばいい」

桃は、さも当然といったように答える。

「まさか、野球部の奴らにレクチャーしてもらえと？ あいにく、

野球部に知り合いはいねえし、見ず知らずの奴がわざわざ情報を渡してくれるとは思えねえぞ?」

呆れて言う克弥に、桃も呆れながら返す。

「何を言う。野球部にはボクたちに関わりがある奴がいるじゃないか。そいつに聞けばいい」

「.....ああ、いたな、そういや」

昼休みにも聞いた内容だったが、すっかり忘れていた。

こんなことを本人が知ったら、またグチグチと小言を言われるだろう。

「頼んだぞ」

桃はそう言って、教室へと戻る。

残された克弥はため息をつき、野球部の専用グラウンドを眺める。

「さっきは専用グラウンドにはいなかったみたいだな」

あれだけの大騒ぎを克弥たちは起こしたのだ。彼が黙って見逃すとは考えにくい。グラウンドにいたのならば、間違いなく、桃のパフォーマンス中に小言を囁きにくるはずだ。

「どこにいるかなあ、遊理のやつ.....」

独り言を呟きながら、克弥は目的の人物を探し始める。

## 九章 彼は何処？（後書き）

次回更新は未定です。詳しくは活動報告にて。

## 十章 情報収集

「やっぱり、グラウンドにはいねえな……」

専用グラウンドの外から確認してみるが、遊理の姿は見当たらない。

あれだけ目立つ容姿をしているのだから、いるなら即座に見つけることができるはずである。

「ここにいねえなら、どこにいんだよ……」

克弥は、深いため息をついて、途方に暮れた。

すると、傍らを何本ものペットボトルを抱えた人物が通り過ぎる。西に傾いた陽光に照らされ、キラキラと美しく光り輝く、銀色の髪

「……………ん？」

克弥は何となく、その人物を視線で追いかける。

視線の先の人物は、野球部専用グラウンドに入っていく、近くにいた部員たちに呼びかけた。

「先輩方、注文のドリンク買ってきました！」

(……………見てはいけないものを見た気がする)

克弥はそう思ったものの、呆然とその光景を眺め続けていた。

爽やかな表情を浮かべ、パシリにされている少年こそが、目的の人物、西岡遊理であった。

遊理は克弥の存在に気付くと、驚きの表情を浮かべた。

一応、手をあげて挨拶をする克弥。

反射的に、手をあげようとした遊理だったが

「おう、そこ置いとけ。そんで早く出て行けよ。ここは才能の無い一年が入れる場所じゃねえんだからよ」

などと、辛辣な言葉を野球部の先輩と思しき人物に投げかけられ、さらに突き飛ばされる。

克弥はその光景を見て驚き、さらに怒りも感じたが、遊理の方は

すぐさま突き飛ばした人物に対して、

「すみませんでした」

と謝り、専用グラウンドから出てきた。

そして、彼は何故か大グラウンドの方に向かってている。

克弥は慌てて遊理の後を追う。

「遊理！」

追いついた克弥は遊理の肩を掴む。

「……何か用？」

遊理はいつもの爽やか青少年の皮を被らず、不機嫌そうに克弥に聞く。

「あ、ああ、その、なんだ……」

勢いで追いかけて呼び止めた克弥は、用件を言うことができないというより、言える雰囲気ではない。

「……僕の実力じゃ、パシリが精一杯なんだよ」

克弥が黙っていると、ぼそりと遊理が呟き始めた。

「中学の頃はさ、リトルシニアのチームでベンチ入りもしてたけど、それぐらいの奴は名門の志士高校にはたくさんいるんだよ。それこそ、どこぞのチームのエースだったって奴がいっぱいね。そんな中じゃ、ベンチ選手だった僕なんて、一山幾らくらいの存在なんだよ。専用グラウンドにも入れてもらえず、こっちの大グラウンドの隅っこで基礎練をするくらいしかできない存在さ……」

独り言のように、愚痴を呟く遊理に、克弥はどう反応したらいいか困ってしまう。

そう、反応に困った上で、

「……俺たちのところに来ないか？」

思わず、そんな風に声をかけていた。

何故かは分からない。もしかしたら、同情してしまったのかも知れない。いや、とにかく単純に嫌だったのかもしれない。友達の落ち込んだ表情をみるのが。

とにかく、克弥は遊理を誘っていた。



「お前たちのところ？ …… ああ、昼間、桃が言ったニューベースボールクラブのこと？」

「実は、野球部と試合をすることになった」

この一言に、遊理は怪訝な顔つきで尋ねる。

「はあ？ 試合って何のこと？」

「桃がむちゃくちゃなことを言い出してだな」

克弥は、先程まで行われていた桃のтонでも行動について、説明する。

「マジ？」

事情を聞き終えた遊理が、呆れたような表情を浮かべていた。

「マジだ」

至極、真面目な顔で克弥が答える。

遊理から『バツカじゃないの？ なに考えてるんだよ？』などと言った台詞が返ってくるのを予想して、同意をする準備まで万端の状態だ。

しかし、

「くくく！ はははははっ！ あ、相変わらず、くく、面白いことするなあ！ くふふ！」

予想外の反応が返ってきた。

先程の愚痴から考えても、ストレスが溜まっていそうだったから、壊れちゃったかな？ と思わず心配になってしまう。

「そ、それで、お前ら五人しかないのに、どうやって、ま、守る気なんだ？」

笑いを堪えながら、遊理が克弥に問いかける。

「あ、ああ、桃には何か考えがあるらしいが、俺にはどうも不安で仕方がない。経験者であるお前がいてくれたら心強いんだが……」

「ふーん……」

克弥の言葉を聞いて、遊理は考える素振りを見せる。

そして、

「……悪い、こっちの部活でまだ頑張ってみたいんだ」

断りの返事が返ってきた。

「　　そうか」

ある程度、予想は出来ていた。

プライドが高く、執念深い遊理が、この程度で野球部を辞めるわけがない。

そう分かっていた上での誘いだっただ。

「それで、用はそのことだけ？」

気のせいかな、先程より晴れやかな表情で遊理が尋ねてくる。

「あ、もう一つあるんだが……嫌だったら、正直に嫌と言ってくれ」「前フリがすでに嫌な感じだね。本当に嫌なことだったら、お前を呪うから」

もはや、猫を被る気が全くないらしく、本来の調子になっている遊理に、克弥は当初の目的を告げる。

「野球部の情報、少しくれないか？」

『はあ？ 何言ってるんだよ。所属している部の情報を対戦相手に話すわけないだろ』と言う答えが返ってくるだろう、というより、それが自然だ、と克弥は考えていた。

「ああ、別にいいよ」

しかし、またも予想外の返答。今日の遊理は、とことん克弥の予想に反するつもりらしい。

「え？ いいのか？」

「ま、少しくらいなら。僕も少し、さっきの件でむかついてるし……」

理由を聞いて少し納得。遊理の本質は根暗で執念深い。先程の先輩の言動にはさぞかし恨みを抱いていたのだろう。

「あ、ありがとな、遊理」

一応、礼をいう克弥。照れくさいのか、遊理は顔を背けて対応する。

「　　で、レギュラーの打撃情報だけでいいの？」

「ああ、むしろそれ以上は覚える気がねえ」

遊理は克弥の言葉に呆れたものの、すぐに専用グラウンド近くで、レギュラーの説明をしてくれることになった。

「レギュラーっていつても、まだ争ってるポジションもあるから、確定しているのは六人くらいなんだ」

「そうなのか？」

遊理がサボってる、もしくはスパイをしていると思われる和不味いので、堂々と見学するつもりがこそそとした偵察になってしまったが、問題はないだろうと克弥は考える。

「まずは、キャプテンの宮本先輩だね」

「ああ、その人の顔は分かる。さつき会ったし」

遊理が指を差した先を見ると、確かにそこには先程まで桃と会話していた野球部のキャプテンの姿があった。ちょうどバッティング練習をしている最中のようなのだ。

左打席にキャプテンが入り、打撃フォームを取る。

「あの人は、なんていうか、本当に野球を楽しそうにする人で、練習も人一倍こなすから、監督を含めて部員全員から信頼を得てる。

勿論、実力も半端じゃない」

遊理が説明を始めると同時に、宮本キャプテンがバッティングピッチャーから投げられた球を鋭いスイングで弾き飛ばす。恐ろしいほどの高速スイングに克弥は驚きを隠せない。

速いライナー性の打球が、張り巡らされた防球ネットに突き刺さる。

素人が見ても分かるほど、強烈な打球だった。

「天性のパワーに、磨きこまれた技術……超高校級と言われ、プロからも注目されている」

遊理からの情報を聞きながらも、克弥の目は宮本キャプテンのバッティングに釘付けになってしまっている。

彼の動作から、目を離せない。催眠術にでもかかったかのように、引き込まれてしまう。

同じ高校生だとは思えない輝きを放つ彼に、見入ってしまった。

しかし、克弥は自分の頬を自分で張って、なんとか意識を正常に戻す。

「……何してんの？」

「いや、このままじゃ戦う前からオーラに飲まれそうだったんで、気合を入れなおした」

遊理の不可思議なものを見る目とともに投げかけられた疑問に答えて、克弥は見入るのではなく、分析するために宮本キャプテンを観察する。

「なんか、苦手なコースとかないのか？」

克弥の質問に遊理が首を振って答える。

「絶対的に苦手ってコースはないね。どんなコースでも、自分のバットの届く距離ならスイングしてくる。しいていうなら、外側低めのコースだけど、ここは誰でも苦手と言えるしね。変化球を苦にするタイプでもない。さっきのスイングスピードなら長く球の動きを見てられるしミートも巧い。プロ注目も納得の実力さ」

「本気で凄え人だな……弱点はなし、か」

「いや……」

克弥の言葉に、遊理が顎に手を当てて考えるような素振りを見せながら答える。

「そういうわけでもない。さっきも言ったとおり、自分の届くところならスイングしてくるケースが多い。それがボール球でも、ね。つまり、あの人を追い込むこと自体はさほど難しくない。難しいコースに投げてファールでカウントを取るって戦法が取りやすい……それが弱点とも言える部分なんだけど……」

遊理は宮本キャプテンの弱点らしきことを話すが、途中で言いよどむ。

「追い込んだ後が面倒なんだろ？」

話の流れを読んで、先に克弥が続きを告げる。

「その通り。下手したらどんな球を投げてもカットされて、完全なボール球は見極められる。そして、球数をドンドン増やされていき、

根負けして甘いコースに変化球が抜けたり、力任せの棒球なんて投げようもんならジ・エンド」

「……厄介なバッターってことは十分に分かった」

しかし、その厄介なバッターに勝たなければ、廃部一直線だ。

正直、こんなクラブ、無くなったってどうでもいい、と克弥は思っている。

しかし、負けたときのことを想像すると、勝ちたくなってくる。

負けたときの桃のことを考えると、途端に負けるものか、と気合が入る。

いや違うぞ別に桃のためじゃない俺が負けず嫌いだからだ、と誰にするわけでもなく心の中に生じた言い訳を掻き消し、

「遊理。他のレギュラーの情報もくれ」

己に課された情報収集の任を全うすべく、遊理に情報提供を促した。

## 十章 情報収集（後書き）

年内に後一回、更新予定。詳しくは活動報告にて。

## 十一章 秘めたる思い

( 要注意人物は、宮本キャプテンに村田福キャプテン、それに田中先輩……意外な名前が挙がったな…… )

遊理から提供された情報を反芻しながら、バスから見える風景を眺める克弥。

( 今頃、桃たちは練習してんのか…… )

四日で野球部に勝てるくらいに野球が上手くなる練習だ。いったいどれほどの猛特訓になることが、想像しただけでも恐ろしい。

だが、負けたくはない。

負けたときの桃の顔は見たくない。

悲しい顔をする桃を見たくない。

彼女の笑顔を見ていたい。

子供の頃から変わらない気持ち。

いつの頃からか抱いていた、抱き続けてきたその気持ち。

桃の笑顔を見続けるために、克弥は誓う。

「絶対に負けねえ」

これから行われるであろう猛特訓にも、四日後の試合にも、それ以外のことに。

どんなことにも負けないと誓いを立てる。

しかし、桃の家に辿りついた克弥は、驚愕することになる。

その家の庭で行われていた、練習風景を見ること。

十一章 秘めたる思い（後書き）

短くてすみません。



## 十二章 練習開始

「恭一郎！」

「あいよ」

桃の声と共に放たれた白球を、恭一郎が左手にはめたクラブでキヤッチする。

「んじゃ、雪華！ パス！」

「オーライ」

今度は恭一郎から投げられたボールを、やはり左手にはめたクラブで雪華がキヤッチ。

「じゃあ、次ははすのん！」

「は、はい！」

同様に雪華からボールが投げられ、そのボールをガチガチとした固い動きで、なんとか受け止める蓮乃。彼女だけ、右手にファーストミットをはめていた。

「……キヤッチボール？」

この風景を見た克弥は、拍子抜けしたと言わんばかりの表情で立ち尽くしてしまう。

「む？ 克弥！ 帰ってたのか！」

そんな克弥に気付いた桃が、声をかけてくる。

「ああ、今さつきな……で、練習してんだよな、これ？ ウォーミングアップとかじゃなくて」

「勿論だとも！ 今日はひたすらキヤッチボールだ！」

無い胸を張って、自信満々に答える桃。

「……なんつーかさ、こんなんでいいのか？ もっとノックとかで実戦的な練習をしたほうがいいんじゃないか？ 四日しかないんだし」

鬼のようなしごきをも覚悟していた克弥にとって、キヤッチボ―

ルという練習はあまりに緩い練習に思えたので、桃に意見を出してみ。

実際、今日を入れて四日しか練習期間はない。それに、練習できる時間帯は放課後のみだ。まるで時間が足りていないこの状況下でキャッチボールしかしないというのは些か悠長すぎるようにも思える。

しかし、桃は、

「キャッチボールにはフィールディング、つまり守備をする際に必要な基本動作が盛り込まれている。基本を覚えずして、何が実践か！」

と、克弥の意見を一喝して、一蹴した。

「それに道具に慣れてもらう必要もある。だからこそ、今日一日はキャッチボール三昧なのだ」

さらに付け加えられた理由に、克弥はある疑問を抱く。

「そっぴや、お前らの道具は何で揃ってんだ？」

克弥以外は野球道具など持っていなかったはずなのに、恭一郎も雪華も、果ては運動音痴で野球には縁のないはずの蓮乃でさえ、グラブを持っている。しかも、蓮乃の物はグラブではなく、一塁手が使うファーストミットだ。偶然、持っていたとは考えにくい。

おまけに靴は新品のスパイクを全員着用している。安物だとしても、それなりの値段になるものなのに、いったい、何が起これば、こんなに簡単に手に入るのだろうか。

「ピーチちゃんが用意してくれてたのよ」

「桃が？ いやまあ、道具の問題を解決できる、って言ったのはこいつなんだから、そりゃこいつが何かしたのは間違いないだろうが、何をすれば、お前らの分の野球道具が揃うんだよ？」

雪華の答えに納得できず、克弥はさらに問い質そうとするが、

「ああ、克弥のスパイクはこれだ。ついでに、マスクにヘルメット、プロテクターも用意しておいたぞ」

その疑問を解くには、さも当然のように克弥にぴったりと合うサ

イズの道具一式を差し出す桃に聞くべきことだろう、と考え、桃に向かつて問い質す。

「何をした!? 吐け、吐くんだ! 今、自首すれば罪は軽くなるかもだぞ!」

「何か犯罪者を取り調べしているみたいだな……というより、完全に犯罪者扱いだな」

桃は頬を膨らませ、不機嫌になりながらも答える。

「つい最近、親父殿の知り合いのスポーツショップの店長が店を閉めるらしいんで、『在庫、漁らせてください』とお願ひしたら、快くオツケーを貰った。もちろん、タダではなかったが格安で手に入れたので、ボクの部活動を手伝ってくれるお前たちに、手に入れた商品をプレゼントした、というわけさ」

要するに、たかった、というべきなんだろうか。真つ当な手段かどうかは微妙だが、合意の下に行われたものならば、法的には問題ないだろう、と克弥は考え、無理やり納得する。

「って、これ、いつ買ったんだよ?」

「昨日だ。みんなが部活に参加してくれないと無駄になるとこだったな」

冗談めかして笑いながら言う桃だったが、実際に克弥たちが参加しなかったら、どうする気だったのだろうか。勢いだけで行動する桃に呆れてしまう。

そして、この話を聞いて、昼休みに抱いた疑問が解けた。遊理が参加できないと分かったときに、人数合わせの部員を勧誘しなかったのは、その部員の分の道具を用意していなかったからのようだ。

深いため息をつきながら、克弥はさらに尋ねる。

「道具の入手ルートはよく分かった。だが、もう一つ聞きたいことがある。この道具はあらかじめ買っておいたようだが、何で俺たちにぴったりのサイズを買っておけるんだ? 俺はお前に靴のサイズなんか教えた覚えは無いぞ」

「ああ、それは俺らも気になってたなあ。何でこんなにサイズぴつ

たりな上に感覚的にもしつくりくるクラブを用意できたんか、って  
同じ事を気になっていた恭一郎も、克弥に便乗して問いかける。

「何を言う？ 簡単なことだ」  
意外なことを聞かれた、と言いたげな表情をしながら、桃は答える。

「何年も一緒に成長してきたんだ。お前らの服のサイズや足のサイズ、手のサイズや感覚の好みなんて把握してるし、何よりサイズは見た目でもすぐ分かる」

「ごめん、お前、気持ち悪い」  
率直な感想が克弥の口から飛び出る。

凄じい観察眼だ、と褒める輩もいるかも知れないが、見た目で靴のサイズや手のサイズを完璧に的中させてくるような神懸った観察眼は、克弥には気持ち悪いとしか思えなかった。

克弥の一言にシヨックを受けたのか、桃は地面に『の』の字を書いていじけだした。

「だ、大丈夫！ 気持ち悪くなんかないわよ、ピーチちゃん！ 私  
もピーチちゃんのことなら身長から体重、スリーサイズ、生理の周期まで知ってるし、好きな食べ物とか趣味嗜好も完璧にリサーチ済み！ さらにには見ただけでその日の体調や機嫌も即座に分かるし、触れば胸の成長具合も分かるわ！！」

「お前はもつと気持ち悪い」  
桃を励まそうと声をかける雪華に、またも正直な感想を克弥が述べる。

「か、克弥くん、もつとオブラートに包んであげて。確かに気持ち悪いけど……」

蓮乃が克弥の正直すぎる言動を窘めるが、本人の自覚なく、さり気止めを刺しにかかっている。

こうして、地面に『の』の字を書く輩が二人に増えた。

「ったく、悪かったよ。気持ち悪いってのは撤回するから早く練習再開しようぜ」

克弥の一言により、即座に復活する桃と雪華。

「よし！ キャッチボール再開だ！ 各自、ただ投げるだけでは意味がないぞ！ 相手が取りやすいボールを投げる、という目標を持って練習するんだ！」

復活して早々、きびきびと指示を出す桃を見て、思わず克弥から笑みがこぼれる。

本当に野球が好きなんだな、と思える桃の表情に、他の連中も表情を緩めていた。

「ところで克弥、お前、ミットは？」

「あ………」

学校からここに直行したため、まだ取ってきていなかった。

桃にどやされながら、克弥は自宅にキャッチャーミットを取りに行く。

そして、克弥が戻ってきたところで、一日目の練習が始まった。

## 十二章 練習開始（後書き）

次回更新は二月に予定。詳しくは活動報告で。

### 十三章 蓮乃の実力

克弥も加わった練習を始めて、だいたい三十分が経過した頃、

「ぜひゅー、ぜひゅー……」

「おい、桃！ 蓮乃がヤバイ！ 目が虚ろだ！」

「む……蓮乃！ 大丈夫か！」

「ぜっひゅ、ぜひゅ、ぜひゅー……」

「そうか、分かった！ 無理をせず、少し休んでおけ！」

「何か分かったのか、今！？」

克弥には荒い呼吸音にしか聞こえなかったが、桃には蓮乃の言葉が通じたらしく、休憩を指示した。

「……桃！ 蓮乃の様子を見ておきたい！」

「そうだな、頼む、克弥！」

ツッコミたいことはあったが、明らかに限界な蓮乃を気遣い、克弥も一旦、練習を離れる。

正直、克弥もかなり疲労が溜まっていた。

キャッチボールと甘く見たが最後、桃の練習はかなりの厳しさだった。

最初のうちは相手を取りやすい球を投げるといふ目的を持つものの、それこそ親子が行う遊びのキャッチボールに近いものだった。

桃が起点となり、バラバラに散った五人の中の誰かにボールを投げ

ボールを受けた人は、次に投げる相手を自由に選び、送球する。

そのようなキャッチボールを続けて十分を過ぎた頃、緩やかだった練習が激流へと変化した。

徐々に桃から放たれるボールがワンバウンドだったり、山なりのフライだったりするようになり、誰に送球するか、ということも桃が指示するようになった。

さらには、桃の送球が意図的に乱れるようになり、移動しながら

捕球せざるを得なくなっていくようになる。

これだけならまだついていけたのだが、送球と捕球のテンポが急激に速くなつていき、もはや、バットを使わないノックに近いものへとなつていった。

もともと運動能力の高い雪華や恭一郎はまだまだ余裕があるようで、いまだに張り切つて桃と練習しているが、運動音痴な蓮乃はギブアップ。桃の家の軒先に座つて休むことになった。

「蓮乃、大丈夫か？」

克弥は大丈夫そうではないことが分かりきつているが、一応、聞いておく。

「ぜっひゅ、ぜひゅ、ぜひゅー……」

「すまん、俺にはさっぱり分からん」

桃には解読できた言語だが、やはり克弥には分からなかった。

「克弥！ その下にドリンクを用意したクーラーボックスがある！

蓮乃に水分補給させてあげてくれ！」

桃が恭一郎に送球しながら、克弥に指示を出す。

軒下を見てみると、確かにクーラーボックスがあった。

さすがにこういうことには気を回すか、と感心しながら、克弥は蓋を開けて、中からドリンクを取り出し、蓮乃に差し出す。

「蓮乃、これ飲んで少し休もう」

「ぜっひゅー……」

蓮乃は力なく頷き、克弥からドリンクを受け取る。

ペットボトルの蓋を外し、蓮乃はゆっくりと中身を飲み始めた。

「あ、言い忘れてたが」

恭一郎からの返球を受けながら、桃がなにやら言ってきた。

「そのドリンク、十本中一本にトウガラシエキス入りのはずれがあるから……」

「じふっ！ か、からっ！ げほっ！ じふうっ！！」

思い切りむせ始めた蓮乃。

「……当たりか……すまん、遅かったようだ」



「お前は鬼か！！ 何でそんなロシアンルーレットを仕込んでんだ！？」

「厳しい練習の後の、場を和ます余興のつもりだったんだが……本当にすまない」

「和むわけないだろ！ 俺らは芸人じゃねえんだよ！！」

克弥は急いで別のペットボトルを蓮乃に渡し、桃を怒鳴りつける。  
蓮乃の看病のため、練習は一旦中止となった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6771i/>

---

W.B.C !!

2010年10月9日21時38分発行